
リリカル銀 すた！～世の中はカオスで出来ている～

きっと木の精だ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカル銀 すた！〜世の中はカオスで出来ている〜

【Nコード】

N1567V

【作者名】

きつと木の精だ

【あらすじ】

赤夜叉先生から許可を頂き、自分も書いてみましたリリカル銀魂シリーズ！内容は最初期の「銀魂×魔法少女リリカルなのは」魔法少女と銀髪の侍〜となっております。あの世界観にらき すた+オリキャラ達が組み込み銀さんと一緒になのはの世界で大いに暴れまくる！！本来なら揺る〜い生活を送っていたはずのオリキャラやこなたちバトルもお見逃し無く！

駄作者なうえに亀更新ですがそれでもおkという心の広い方はご覧ください！

ブローグ？普通じゃ在り得ない事が起きるから世の中ってものは面白い！

俺の名前が可笑しいだと……？そいつはきつと……

木の精だああああああ！！

オリキャラ？？？「やかましいわっ！！！」（ドクッ）「

がはあっ！？な……なにすんのさいきなり！？

オリキャラ「いや、あんたこそなに言ってるの？うるせえしいきなりすぎるし確実に引かれるわ！」

え……？惹かれる……？困ったな……。

こなた「素敵な聞き間違いだね、ようやく初投稿できて舞い上がってるのは分かるけどさ」

いやあゝ駄作しか書けない頭だからかなり時間かかってしまったねえ、やつと此処まで来たよ

オリキャラ？？？「ところで俺の名前はいつになったらちゃんと表記されるんだ？」

それはまだ始まってないからねえ、そろそろ行っちゃう？

オリキャラ？？？「だな、こなた、あれ頼む」

こなた「おk、”さあ、始まるぞますよ?”」

オリキャラ?????”いくでがんす”」

”フンガー”

ALL””(突込みがない…………orz””

ブローグ？普通じゃ在り得ない事が起きるから世の中ってものは面白い、

とある日の陵桜学園、既にその日の内の授業は終了しており、生徒達のある者はそのまま帰路につき、ある者は道草をし、またある者はこれから部活へと向かう、窓際から西日が差し込む様な時刻に未だ若干の賑やかさが残る三年B組の教室内で一人の少年が机に突っ伏していた。

組んだ両腕の中に黒髪の頭をうずめて、静かに息をする音だけが聞こえる、早い話が寝ているのだ。

????「よあ、いい加減起きろって、もう終わってるぞ？」

と彼の近くに名前も分からないクラスメートの男子が声をかけてきた、しかし当の本人は”むう……あとご飯……”と起きているのか寝ているのか分からないふざけた返事を返す。

????「おいおい、ま、どっちにしろいいけどね？」

とその生徒をやれやれといわんばかりに軽くにやけ、肩をすくめると彼の元から離れていった。

????「おい、恭平そろそろ起きなよ。もう授業終わったよ！」

????「ん……？おお、そうか……。なんか五限の途中から記憶が無いな……」

???「恭平いつもソレだよね」

そんな彼の元に今度は青い長髪の、パツと見ても良く見ても高校生には見えない少女《泉　こなた》が近づき肩をゆする。眠りが浅くなっていたのか恭平と呼ばれた少年はすぐに目を覚ますと、体を起こして両目をこすった。

恭平「んでいつもお前が起こしにくるんだよね……先に帰るときやいいのに」

こなた「何言ってるの、今日は一緒にアニメイトで買い物してから帰ろって言ってたじゃん？早く行こうよ」

恭平「あゝ……だったなスマン。かがみ達はもう帰っちゃったのか？」

こなた「そだよ、なんか皆今日は用事があるらしくてね。さつき教室の出でいったトコだよ」

会話をしながら少年《深海　恭平》は慣れた手つきで帰り支度を整えていく、出来るだけ早く店舗に向かい銀〇のコミック最新刊を買いつきたいのだ。

恭平「こなたはリリなのだったか？お前にしちゃちよいと今更感があるんだが？」

こなた「いや、ビデオで録画してたやつ、つい消しちゃってさ……DVDに走ろうと思って。人気があるのは最終回迎えても人気あるからねえ、尤もコミック版じゃ四期が俄然爆走中だけど。」

恭平「あゝ分かる分かる！グレラガとかスクライドとか真！ゲツターとかな……つとよし、行くか！」

こなた「なにその何処までも熱くなれる作品チョイス……ってちよつと待つてよ！」

先に教室の外へと向かう恭平の後を慌てて追うこなた、そしてあつという間に

こなた・恭平「やって来ましたアニメイト！！」

いくらなんでも早すぎる？あまり気にしないでほしい。

恭平「んじゃ、俺こつちな。買いもん終わったら店の入り口で集合つてことで。」

こなた「おk、私は無印からStSまでまとめて買うからちよつと遅くなるかも。」

恭平「……流石にちよつと自重してくれ。」

兎にも角にも目的地にたどり着いた二人はそれぞれ目当てのものを

探し始める。

恭平「銀さん達の人気も衰え知らずだねえ……一回死んだアニメも復活するそうだし」

なんて事を呟きながらコミックのコーナーで銀たま○シリーズに行き着く恭平、連載が始まった当初はここまで長い付き合いになるとは思わなかったが、

恭平「今じゃ立派に愛読書だもんな、……余談だがこういう長い連載モンの漫画は大抵初期はキャラの顔つきの書き方が定まってなくて、回が進むことにつれて調整されていくから物によっちゃ第一巻と最新刊のキャラがもはや別人レベルになってたりするんだよね……そんなんを見比べながら作者先生の画力が上がっている事を確認するのもまた一興つと……なんか上から目線か？俺。」

と誰に言っているのか分からない自論を立てながら実際に銀たま○の一卷と目当ての最新刊を見比べる、我等がヒーロー銀さんもデビュー当時はいろいろと微妙に違っていて、夜空をバックにしている表紙のイラストも今と比べると何となく違和感を感じる。一方の最新刊のほう表紙は腰に木刀を刺して腕を組み、見慣れた顔つきで佇んでいる銀さん

.....そして右隣
でレイジングハートを構えるのはと左隣でバルディッシュを構える
フェイト。

恭平「.....あ？」

一度思考を停止させる恭平、目を静かに閉じる。.....落ち着こう、
落ち着こう落ち着こう落ち着こう.....、まずはもちつこう。
きっと自分は疲れてるんだ、きっとそうに違いない。いや絶対にそ
うだ、じゃないとおかしい、ホントあり得ない。何で銀たま○になのは
とフェイトがいるんだ？二人がいるのは魔法少女リリカルなのはで
ある、間違いない間違いない間違いない。.....大きく深呼吸して
目を開ける、変わらない表紙.....、ありえない現実.....、知らず
知らずぽかんと口をあける恭平、そしてついに、

恭平・こなた（の声）「はあああああああああ！！！！！！」
「？」

アニメイト店内で二人の絶叫が木霊した。

恭平「（ちょ、なにこれ！？何なのいったい！？何でりりなのが銀
。（たま）の世界にいるわけ！？個人的に興味はあるけど違うだろ
おおおお！？）」「恭平恭平恭平っ！！！！ん！？」

恭平が心中で目の前のデザインミス（？）に突っ込みを入れていた
らこなたがやってきた、珍しくあわてている様子で。

こなた「ちょっと此れ見て！なんかあり得ない事になってるんだよ
！！」

恭平「おお！？こつちもお前かなりあり得ない事になってんだ……
……よ？」

急に語尾に勢いが途切れる恭平、彼の視線の先にはこなたが恐らく
購入するはずだったりりなのDVDでそのパッケージイラストに
はフェイトやなのはが描かれており………そして真ん中には
背中を向け、木刀を肩に乗せる感じで担ぎ顔だけこちらに向けてな
んかむかつく笑みを浮かべている銀さん。

恭平「だからなんでだあああああああ！！！！！！？」

本日二度目の大絶叫、お疲れ様です。

????「あの、お客様。何かしら当方にご不満を抱かれる不手際がありましたでしょうか？」

其処へ二人に声をかけてきたのは一人の男性、特徴的な髪型に熱さを語るようなコートの腕まくりと指貫グローブスタイルに燃える様な眼差し、そして堂々と店長と書かれている帽子、このアニメ（ピート大宮店店長、兄沢命斗である（因みに今は落ち着いている場合によつてはやたらテンションが上がる）。いきなり大騒ぎしている二人に何か不審に思ったらしい。

恭平「いや、何かしらもなにも、明らかにおかしいでしょこのパツケージと表紙は？入荷したときに気づかなかったんですか？」

と問題となっている二つの商品を相手に見せる恭平、しかし兄沢は困ったような顔で首を傾げるだけである。

兄沢「……………あの、おかしい……………と仰るのは？どのあたりが……………」

こなた「どの辺りって……………、一目見たら分かりませんか？銀。（たま）

にリリなのが合体してるんですよ？」

問いにこなたが答えると、ますます訳が分からないと言わんばかりな表情になる兄沢、誤魔化しとかしらを切ろうとかしているようには見えない。……漠然とだが恭平の中で小さな仮定が生まれた、もしかした、もしかしたらの可能性だが

恭平「（この人にや……見えてないのか……？）あ、あのさ店長さん、この辺り……なんか別のキャラが描かれてる様には見えません？」

兄沢「……えっと、此方としましては至って普通の……銀時が描かれているようにしか見えないのですが……？」

レイジングハートを構えているなのは指差しながら聞いてみるが、店長の表情は戸惑うばかりでそれでも何とか答える、疑問がいつそう確信へと近づき今度は視線をこなたへと向ける、ちようど相手も自分を見ていた。

恭平『おいこなた、お前には見えてるんだよな？このクロスオーバーな現実が。（アイコンタクト中）』

こなた『ん、そうだよ。でもなんか店長の様子おかしいよねさつきから……、もしかしたら私達のほうがおかしくなっちゃったのかな？（アイコンタクト中）』

恭平『んなこたあねえよ……』とは言いがてえんだよなあ、いよい

よ俺たちにも完全にフィルターが実装されたか？（アイコンタクト中）
」

こなた『むう………噂には聞いた事があったけどまさか私達になるなんて…（アイコンタクト中）
』

恭平『まあ、待て俺たちが手の施しようのない末期かどうか、確かめる事が出来る方法がある（アイコンタクト中）
』

こなた『それって？（アイコンタクト中）
』

この間数秒程度の視線だけの会話、それにしてもこいつらよく此処まで具体的な内容を読み取れるモンである。アイコンタクトって多分こんなじゃねえ。

そして恭平の語る方法とは

兄沢「ありがとうございましたー！またのお越しをー！」

他の店員A「LLLLLLLL」ありがとうございましたー！！！！！！

購入する事だった。店を出る恭平の後ろで ≡ ω ≡ ↑ こんな顔のこな
たが軽いため息をつく。

こなた「まあ、大体予想は出来ただけだね」

恭平「無難といえば無難だろ？これで中身見てカオスな展開だった
ら俺たちがヤバイ。もし普通な銀。(たま)なら……店長のほうが
責任逃れしてんだろ……可能性低そうだけど」

相方のどこか呆れられたような言葉に苦笑しながら袋から件の漫画
を取り出して歩きはじめる恭平、その彼の隣並びながら興味深そう
に混合本、命名リリカル銀魂(彼女が命名、誰がなんと云おうと
この世界の中ではこなたが命名、苦情はある程度受け付ける)を見
つめている、彼女の中で若干趣旨が変わってきた。

こなた「悲しいけどそれ、現実なのよね。というわけで早く確認し
ようよ！個人的に興味出てきた！」

やっぱり……。

恭平「あいよ……、確かにカオスならカオスで面白そうだな」

互いにやけた顔の二人、ある意味流石だ。

話が進まないので恭平は適当なページに指を挟みこんで一気に表紙を捲った。

——その瞬間彼らのいた空間が彼らを除いて止まった、ビデオやDVDなどで一時停止ボタンを押した画面を例えにするならお分かり頂けるだろうか、とにかくそれまで賑やかだった繁華街が一気に静まり返った。

なんとも強制的な超常現象……結構笑い事じゃない。

恭平「……………は？」

こなた「なにこれ……………？なんか……………止まってる？」

此れにはさしもの二人も驚きを通り越して、きょとんとする。何が起きているのか分かっていない様子で、しかも事態はそれだけでは終わらない、恭平が手にしたその漫画がゆっくりと其処から離れ少し上空へ浮遊する。勿論見たかんじ系とか紐はついてない。更に

恭平「のわあっ！！？今度はなんか光り始めたっ……………って此れはもしかして！？」

こなた「ちょ、眩しっ……………！！……………そうだよ恭平！私もピンと来た！」

度重なるありえない現象は起こる中二人は何か察し、両腕で顔を覆い少しでも光を抑えながらもその根本を見据える。何か心当たりがあるのだろうか。

こなた「これは！」

恭平「間違いなく！」

こな・恭「脱日常フラグ！！」

.....
ゑ？

こなた「夢にまで見たのが今起きている！ゆるい生活の終りフラグ来た！異世界への扉フラグk t k r！！しかも自分に！」

恭平「妄想で終わっていた現象が実現した！転生フラグが来た！最強もしくは強力設定付与フラグ来たのか！？しかも自分に！！」

こいつらマジスゲーわ。

恭平「こなた！分かってるな、この先の展開！」

こなた「もち！このまま私たちは一旦光に飲み込まれるのがセオリーだよ 其処から先は..... たぶん神様か女神様が、もしくは悪魔辺りに会うんじゃない？」

恭平「そうなる事を激しく期待！でもその場合はお前も一緒なのが大前提だ！」

こなた「おおっ、嬉しい事言ってくれるじゃん！……つとそろそろ時間切れみたいだよ？」

二人の予想通り光は膨張し続け二人を侵食し始めている、恭平もこなたも全く抵抗どころか逃げ出す事もしない。やれやれ……。

恭平「みたいだな、それじゃまた後で……離れ離れは嫌だよ？」

こなたを見て満面の笑みを向ける恭平、楽しみで仕方ないのだろう。

うのに——セリフ後半の心配なんて無用だとい

《まったく、ようやくここまで来れたのですね、本格的に待ちくたびれました》

恭・こなた「「あ、多分女神様だ」」

やっと語り掛けれるようになった声を聞いて呟いた言葉を最後に、私（女神）は彼らの視界をホワイトアウトさせた。

ブローグ？普通じゃ在り得ない事が起きるから世の中ってものは面白い！

ふう……………やっと終わった、小説って書くの難しい。

恭平「ああ、お疲れさん、んじやさ」

こなた「言わせてもらうけど」

二人「ふざけてるだろ？」

へ？

恭平「いや、へ？じゃねえよ！？なんだよ銀^{たま}。って伏せ文字のいみねえだろ！！」

なに言ってるんだ、元から伏せる気なんてない。は”たま”って読めるからこの掛け合わせなら……

恭平「上手くねーんだよ！！んじゃアニメイト^{ピー}はどう説明すんだ！？」

なに言ってるの？ピー音に意味なしってのは銀^{たま}。じゃ当たり前だろ？

こなた「らきすただったら普通に有効活用されてるんだよ！」

なんか最後だったのにぐだぐだだな、誰のせいだ？

二人「お前だ！！」

ああ、もつとにかく終わるぞ落ちもつきやしねえ！

恭平「都合が悪くなった強制終了かい、んじゃ言う事だけ言っとけ」

了解！このような駄文にお付き合いくださりありがとうございます！
た、感想、評価お待ちしております！！

こなた「中傷、批判、荒らしなんかは控えて欲しいよ！」

ALL「それじゃ、バイー！」

ブローグ？バトル系の世界に一般人投げ込むほうが無理がある（前書き）

木の精だ「更新遅い？そいつあきつと……………木
の精だあああつ！！」

恭平「……………またそれが大将」

木の精だ「やれやれ、ようやく二話目だよ」

恭平「随分時間かかったんだねえ、もうちょい早く出来なかったのか？」

木の精だ「こなたとこなたと同じオタクレベル設定のお前の気持ちになりきって考えてたら微妙に長くなった」

こなた「今回はいよいよ転移&私と恭平の設定決めなんだよね」

木の精だ「応、で次がプロフィールになる予定だ」

恭平「んじゃまあ、さくつとやって次の話につなげるか、読者の人はいい加減いきなりなオリキャラの俺の事を知つときたい人も……………いると思うし」

こなた「さあ、始まるぞますよ？」

恭平「いくでがんす」

木の精だ「ふんがー」

プロローグ？バトル系の世界に一般人投げ込むほうが無理がある

《?????内》

恭平「(……此处が、あの光の中……か？」

光に飲み込まれた恭平が気がついた空間は周囲何処を見回しても、白一色に染まっていた。今自分がどういう場所に立っているのか、それすら分からない程に視界が悪い、何かモヤミたいな物が充満していて凄く深い霧に包まれているような感じだ。

恭平「(……って今はそれよりも)k「恭平……？近くにいるんだよね？」… たった今呼ぼうと思ってたところだよ、かなり大声で。」

20

すぐ近くで心配そうな声が聞こえてきた、隣をよくよく見ると、長髪っぽい髪に特徴的なあほ毛といったこなたらしい人影が何とか見える。

こなた「なんかよくあるパターンで”光に包まれた瞬間別の場所に飛ばされた”とかにはならなかったみたいだね。ところで最後に聞こえてきたあの言葉、私の空耳じゃあないよね？」

恭平「ああ、光に飲まれる瞬間に俺も聞いた。声のトーン的に女っぽいから……^{セオリ}定石通りなら女神様だろ？」

こなた「んで此処からの展開としたらそろそろ出てくるよね？」良くぞ私の期待に添えてくれました」とか、「私の言葉を聞いてくれた事に、感謝します」とか言って。」

恭平の言葉を聞いてこなたの声の調子が飄々としたものになる、表情は分からないが恐らくはにやけているのだろう。釣られて恭平もあごに手を当ててにやけ顔を作る。

恭平「いやいや、もしかしたら電波な会話が始まるのかもしれないぞ？それともあからさまな上から目線の命令か？」

言いたい放題である。

?????《……………分かつてはいましたが、かなり珍しいタイプですね。泉 こなた、それに深海 恭平、普通はもつと動揺するものなのですが。》

と凜とした声が前方から聞こえてきた、途端に少しずつモヤが晴れ始める。そこで確認できたのは白く発光する光の球体が一つ浮かんでいた。

こなた「おおっ、これまたお約束な展開だね、姿形を留め止めないタイプの女神様か。」

恭平「……………一応聞くけど、あんたが俺達を此処に連れ込んだのか

……？あゝ……《女神で結構ですよ》女神様。」

自称女神の存在にそれぞれ反応する、こなたは大体の予想が的中していたのかにやりと口元を緩ませ、きらんと目を光らせて得意げで（この時点では濃かったモヤはかなり消えているので完全にこなたを確認できる）、恭平はまさか聞かれているとは思わなかったのか少しバツが悪そうに視線を泳がして頬を掻く。

女神《お二人に対してそれぞれ答えましょう。こなた……私には定まった肉体はありません……、そして恭平、貴方達の予想していた通り、この異空間へ招いたのはぞ私です。」

こなた「なるほどね、……それで？わざわざ私達みたいな一般人を、いったい何の用で呼んだの？よもや神の世界の観光案内じゃないよね？」

恭平「ま、こつち側としちゃ、むしろそんなどーでもいい用事のほうがありがたいんだけどね？」

女神の返答にこなたも恭平も少し引きつった笑みを作る、長年積み重ねてきたオタクとしての経験から、やはり展開が読めるのだらう。

女神《……では此処に来て頂いた理由になりますが……単刀直入に言えば「世界とかを救って欲しい系？」………正解です、………本当にやりにくいですね貴方達は。》

いざ現状の理由を伝えようとしたら言い当てられる、まるで肩すかしを食らったようで、《女神》であつてもどこか気分が良いもので

はないらしく、少し不機嫌気味なため息を漏らした。

こなた「といっても大雑把にだけどね、詳しい内情とか、どうしたらいいかとかは全然。その辺の説明はしっかりしてよ。」

恭平「大方あのリリカルなのはと銀魂の混同作品の事だろ、ありや一体なんだったんだ？」

女神《……分かりました、では順を追って説明しましょう。まず貴方達が見たというその、”リリカルなのはと銀魂の融合した世界”というものは本来とは違う世界、”もしも”という可能性の上で成り立っている世界です》

二人の言葉に気を取り直すように《女神》は説明を始める。

こなた「平行世界……、パラレルワールドだね。」

女神《それは源の世界を元として無限に広がり続けます……そして私達《神》《女神》はそれらの世界を観測し続ける事までを旨としているのです。」

恭平「……あゝ成る程な、また読めてきちまったよ？話の先が……ほとほと難儀なこったねえ……《……このまま続けても？》勿論どうぞ、一応あってるかどうか確認したいし。」

女神の一部の言葉で前髪を掻きあげて苦笑いをこぼす恭平、その彼に《女神》は抑揚のない言葉で尋ねてきた、多分一々話の腰を折ろうとするので少し怒ってる。

女神《……此処からが重要ですが……、厄介な事に私達とは正反対にその平行世界を認めずに滅している存在があるのです……
……「何も言わねーから続けてくれ、何となく俺に視線が向かってきている気がするのは、気のせいにしとくから」…彼等、もしくは彼女等は”可”によって生まれた平行世界とは逆に”不可”によって生み出された存在。故に平行世界を消すためならばどのような手段でも躊躇う事はありません。」

繰り返すがこの《女神》には肉体はない、しかし恭平には自分にまるで沈黙間自分に視線を向けられている気がしてならない、あえて言葉にするなら”割り込んでくるなよオーラ”といった処か、それを全力で当てられているように思えてならないのだ。

こなた「成る程ねーそれで《女神》様は困っちゃう訳だ、基本的に見てる事しか出来ないから。」

恭平「ああ、だがそれじゃお仕事の観測を続ける事が出来ない、そして自分は介入できない………だったら他の奴らにやらせるしかない………そんな所だろう？」

女神《……はい、其処で今回私が選定したのが貴方達のお二人というわけです。」

《女神》の締めに入った説明にこなたと恭平は同時にため息をつきうな垂れる、やれやれといわんばかりに。再び顔を上げその表情は

少し困ったように笑っていた。

恭平「……正直に言わせてもらうと、いきなりで面倒だね、おまけに物騒みたいだ。」

こなた「怖いし痛いのだだし家に帰れないのはごめんだし、大体昨日まで唯の一般人だった私達にそんな事が出来るのか不安だし。」

” あゝ……、やだやだ ” とあからさまに嫌々な素振りを見せる恭平とこなた。

恭平「出来る事ならお断りして、家に帰ってギャルゲして飯を食ってエロゲして風呂に入ってネトゲして寝たいモンだよなあ？こなた……出来る事なら。」

こなた「全くだよ、出来る事なら今まで通りの方がいいよ。幾ら興味があるからって自分がやろうとは思えない、下手をしたら死んじ

やうかもしれないんだから、こういうのは自分は安全な場所で見ているから面白くて、早い話が他人事だから楽しめるもんなんだし、出来る事ならやりたくないなあ……。」

再びわざとらしく大きなため息を漏らす二人、あくまでも”面白そうだ、楽しそうだ、でも自分がやる分には別問題”といった具合でやる気というものが全く感じられないが、その口調は白々しく、何かを誤魔化そうとしている様に聞こえる。

女神《……その様子を見るに、どうやら既に理解できているようです。自分達に拒否権が無い事に。》

恭・こな「……っ！」

女神のそんな静かな言葉に、それまでワザとらしく巫山戯ていた二人の表情が強張った…… 凶星なのだ。

そう、自分達は断れない、断りたい、が断れない断ってはいけない…… 絶対に。

——目の前の《女神》はこう自分達に説明している”もしもの世界は無限に増え続け、それに比例してその世界を消す連中も生まれてくる”即ち

こなた「……このまま帰っちゃったら今度は私達が危なくなるんでしょ？ 異世界を助ける側から、今度は異世界に助けられる側としてさ。」

恭平「……こうしてあんたと出会っちゃった俺達が”もしも”にな
ったって訳だ……展開が読めるようになったオタク脳も、こうい
う場合によっちゃ嫌になるな。気づかなきゃ良かった……。」

もう此処までくると下手に惚ける必要もない、再び困ったように笑
みに戻す二人。こんなものは依頼でも要請でもなんでもない、唯の
脅迫だ。一体何をどうしたらこんなトンデモな事態に巻き込まれる
のか、ゲームやアニメの中だけにしたい欲しかった、本気で。そんな
愚痴を心中でこぼしながらも、彼は決めている言葉を口にする。

恭平「……やるよ、最大のバックアップを絶対条件でな。」

こなた「……私も受け入れる事にするよ、それ以外にルートは
ないみたいだし。」

恭平の言葉に便乗して、こなたも頷いた。

女神《貴方達の英断に、最大の敬意と感謝を……ではまずは最初
に私との契約を。》

そう女神が言った途端恭平とこなたの胸の辺りがほのかに光り始め
る、色は恭平が緑、こなたが青色だ。いきなり自分達の体の異変に
二人は一瞬ビクッとするが、すぐにその光は収まった。

恭平「……ん？今のが契約か？」

こなた「随分あつさりしてるねえ？まあ、『女神』様との契約で”この契約書類に目を通して問題なければサインと判子を”よりかはみただけ。」

女神「これは単に私からの支援を受けることが出来るようにするためだけのものですから、それとももう少し大げさな演出が欲しかったですか？」

恭平「いんや、結構だ。其れであんたは俺達に何が出来るんだ？」

女神「恐らく貴方方が思っていることの最低限は出来ますよ、取り敢えず身体能力の驚異的な向上とその上限をなくして青天井に、後いざ戦闘というときにぎこちなさが無いようにやたら高い戦闘技術とすぐに慣れる事が出来る順応性を付与しますね。他には……別の世界の能力とかでも一つぐらいなら」

と一度に女神が設定を捲くし立てると契約のときと同じく、二人の体が一時的に光に包まれる、『他に何か欲しいものはありますか？』と女神が尋ねると

恭平「んじゃ調理能力も飛躍的にアップしといてくれ、上手い飯が食えるかどうかでコンディションは大きく変わる。」

こなた「それからどんな世界でも通用できる形で莫大な資産もお願い！地獄の沙汰も金次第だからね、先達ものはやっぱお金だよ、桁が京になるぐらいまで。」

女神「どちらも全然構わないのですが……、こなたは使い切れま

すか？半端じゃないですよその額。》

すこし、いやかなり尋常ではない金額を要求される、それ自体は問題ないのだが其処までする必要があるのか若干疑問に思う《女神》

こなた「まあ人生にながあるかわかんないしね、ホントに。お金で解決できる事って結構あるしこれぐらい持って行つとけば安心ですよ。」

恭平「つとそうそう後俺達は他の世界にいる間は不老化にしてくれるのか？自分達の世界に戻った時俺らだけ成長してたら疑問がでる。」

こなた「後はバトル系の能力で……………どのアニメ、ゲームから持ってこようかな。」

顎に手を当てて少し悩むこなた、イメージされるものが多すぎてすぐには選べないのか難しい顔を作っている。一つだけという規制がある分更に悩めしいのだろう。《女神》の加護というのに随分しょぼい話だ。

恭平「いやいや、此処はいつちよあえて原作無しの厨二な力をもらってみるのも面白いかもしれないねえぞ？ってなわけで、そういう”俺だけの”みたいな武器とかはないか？」

女神《…………オリジナルで零からですか、まあ出来ない事もありませんが元がないだけに少しだけ付与が遅れてしまいますよ？》

恭平「……………そっか、まあ仕方ないね。取り敢えず設定だけ決めるか

らその通りに作ってくれ」

女神《分かりました》

女神の返答に恭平は微苦笑をこぼして軽く肩をすくめる。

恭平「んじゃまず形状は日本刀で鞘は赤、刀身自体は黒で頼む、刀としての性能は斬撃は任意で飛ばせる、リリなの世界でのAラン魔法以下は楽に切り伏せれるといったチートレベルは当たり前だ、ついでにその状態でリミッター有りにしといてくれ、勿論俺専用で俺以外扱おうとしても？死ぬほど重い”、”鞘から抜けない”とか言う拒絶設定もつけるぞ。んで普段は素粒子化してて目に見えないが俺の意思一つで簡単に手元に形成、具現化するのもお約束だ。最後にリミッターを解除したときは刀身に漆黒のオーラがまとわりつくような感じで頼む」

女神《了解です、貴方達を送った後早速取り掛かりますから数日ほど待っていてください……しかしすごい厨二ですね、最後とか特に自分の武器の説明を終えた恭平に対する女神の口調は少し苦笑気味である。しかし言う方も言う方だが了承する方もある意味すごい。

こなた「よし！決めたよ私の能力！」

とそれまで黙っていたこなたの声、その顔は自信に満ち溢れている、ようやく自分にあった能力に思いついたのだろうか。

恭平「お？決まったかこなた、なんの能力にするんだ？」

こなた「ん、能力で私の長所を思いっきり伸ばしてみようと思ってね。そこで思いついたのが――」

一度区切つて息を吸い込むこなた。

こなた「情熱思想理想思考気品優雅さ勤勉さあ、そしてなによりもおおおおお！！！！！！速さが足りない！！！！」

恭平・女神「《！！》」

こなた「で知られている世界の三大兄貴、スクライドのストレイト・クーガー兄貴のアルター能力、ラディカル・グッドスピードにしたよ。脚部限定とフトンブリッツもつくんだよね？この場合」

女神《中々いい能力を持つてきましたね、こなた。勿論この場合は同一となるので両方付与されますよ》

こなた「んじゃカラーリングは2pカラー的に青に変更してよ、最後にオプションとしてクーガーモデルのグラスアン（青）も付けてくれたら嬉しいよ！」

恭平「……大体こんなもんかねえ。……つとそうだ忘れてた飛行能力！魔力使わずに飛べる力を俺達に用意してくれ！」

そろそろ締めに入ろうとしていた恭平が思い出したように付け足すと、こなたも気がついたようにはっとした表情になる。

こなた「一応言っとくけど魔力はいらないからね！あつたらあつたで色々面倒な事になりそうだから、あくまでもめちゃくちゃ強い一般人で通すよ、ただし魔法の耐性はやたら高めで！それから不死もNG！」

女神《ではそのようにしておきますね、他に無ければそろそろ転移を行います、注意事項を言っておきます、一つは貴方達が行く世界の基盤はリリカルなのはですが知っているからといって、これから起きる事を喋るのは完全にアウトです。》

恭平「部外者が因果律を直接捻じ曲げるのは世界も許してくれねえか。」

女神《次にその世界は既にパラレルワールドとして成り立っています、既に”世界を滅する者達”が動いていても不思議ではありません、下手をしたら貴方達と同じく別世界の存在も送り込まれる可能性もあります、十分気をつけて。》

こなた「おk！把握したよ！」

女神《最後にこれは注意ではなく単なる補足ですが、向こうの世界へついても私との通信ぐらいは可能です、分からない事や逆に分かった事があればその都度伝えてください」

恭平「了解だよ、色々当てにさせてもらう。」

女神《それでは、いよいよ転移を開始します、じっとしててくださいね。》

《女神》の補足説明が終わると今度は空間そのものが白く光に包まれる、それは収まる様子は無く発光の強さは増し続ける。

恭平「いよいよ……か」

こなた「いよいよだねえ」

光に包まれながら二人は自嘲気味な笑みを浮かべる。

女神《ありきたりですが》どうか、お二人の行く未来に光があらんことを……》

ホワイトアウト寸前に聞こえてきた《女神》の言葉を最後に、二人は来たときと同様、一度意識手放した。

ブローグ？バトル系の世界に一般人投げ込むほうが無理がある（後書き）

木の精だ「つとまあ、こんな感じだ」

恭平「なんか個人的にチートって言う割にはちよいと控えめな設定だな」

こなた「まあ、少しぐらい穴があったほうが面白って言うのあるかもだけどね」

木の精だ「後もう少し終りを上手い具合に演出したかった、一話と同じ感じになっちゃったしorz」

こなた「でもさ、私ってああいう反応になると思う？らき すた知ってる人はむしろ喜んで食いつくとか思ってる人多いと思うけど」

木の精「いや、リアルだったら寧ろ高度のオタクのお前だからこそよほどの事がない限り即答で断る、と俺は思うぞ、同じ理由で恭平もな」

恭平「だが断る！！の一言で一蹴するな俺達は」

木の精だ「では、今回はこれまで、読者の方々、駄文にお付き合いいただき誠に感謝です！」

こなた「評価、感想などお待ちしてるよ、よろしくね」

キャラクター紹介オリキャラ+らき すたキャラ？ 所謂初期設定みたいな

木の精だ「なに？最近蝉の鳴き声がやかましい？そいつあきつと…

………木の精だああああ！！！！」

恭平「まさかとは思うがそれ毎回やるきか？大将」

こなた「今回はストーリーじゃなくて単なる説明だよ」

木の精だ「さてと、それじゃやるか」

こなた「さあ、始まるぞますよ？」

恭平「いくでがんす」

木の精だ「フンガー」

服装忘れてました

キャラクター紹介オリキャラ+らき すたキャラ?? 所謂初期設定みたいな

名前 深海 恭平

フリガナ フカミ キョウヘイ

性別 男

年齢 18歳

職業 高校三年

趣味 ゲーム（携帯・TV・カード・ボード・PC）、アニメ・漫画鑑賞、剣道の稽古。

身長 173cm

体重 61kg

容姿 黒髪でつんつんした髪型（うに頭つて言えば分かると思う、Get Backersの御堂 蛮みたいな感じ）、つり目で赤い色の瞳、若干細身だが筋肉質。

服装 学校の制服だったはずだが、なぜか移転後は私服に着替えてる状態に

基本黒の肌着に深緑のGパン、必要なときはこれにフードがついた外套を着込む。

どつという素材で出てきているのか濡れない、防水って言うレベルじ

やない。

そのくせ洗えば汚れはすぐ落ちるご都合使用である。

性格 色々と楽しい事が好きで飄々としている、そして重度のオタク。

出身世界 らき すた

属性 オリジナル

使用武器 日本刀（名前未定）

大事なもの 自分 泉 こなた 泉 そうじろう 小早川 ゆたか 成実 ゆい 柊 かがみ 柊 つかさ 高良 みゆき

嫌いなもの 偏見者 胡瓜 かずのこ

好物 中華全般

補足説明

陵桜学園の高等部に通う三年生、普段からこなたとつるんでいる為柊姉妹や高良 みゆきといった女子生徒（ある種重要）とも仲がいい。訳があつて幼少の頃から泉家で世話になっており、こなたとはそれ以来の付き合い、恋愛感情とかは今のところないが大事な家族だとは思っている。また同じく幼少の頃に剣道を習っていたことがあり現在でも自己流でしょっちゅう稽古に励んでいる。

元々面倒見がいい為、ゆたかにはこなた共々懐かれており、“お兄ちゃん”と呼ばれている（本人はやめさせたいらしい、“血の繋がりは無いわけだし萌えるシチュだがリアルでそれはアウトだと本人

談”)

《女神》によってリリカルなのはと銀魂のミックス作品の中へ入り込む事になった、一応この作品の主人公キャラである。

《女神》の加護によって飛躍したステータス（あくまでも参考程度に）

戦闘適正	SS	近接戦闘能力	SS	中距離戦闘能力	AAA
遠距離戦闘能力	D（届かねーよ！！by本人	飛ぶ斬撃は距離が開くほど威力も落ちます）			
機動性	AAA+	魔力耐性	AAA	成長率	SS
属性	AAA			巻き込まれ	

こんな感じ？

名前 泉 こなた

フリガナ イズミ コナタ

性別 女

年齢 18歳

職業 高校三年

趣味 ゲーム（携帯・TV・カード・ボード・PC）、アニメ・漫画観賞、たまにそうじろうと格闘技（合気道系）の稽古（↑これだけは本作品オリジナル設定）

身長 142cm

体重 (書いていた紙に極太のマジックで”一応これでも女の子だからね、流石に教えたくないよ”と書かれていて分からない)

容姿 公式と全く変わらない

性格 これも全く変わらない

服装 こちらも制服ではなく私服にチェンジ

水色のTシャツに緑のショートパンツ、黒のニーソックスに赤のロングブーツとなっており素材性能は恭平と同じくおかしい事になっている。

出身世界 らき すた

属性 公式

使用武器(能力) ラディカルグッドスピード(スクライドより抜擢 詳しくは其方のwiki等で)

大事なもの 自分 深海 恭平 泉 そうじろう 小早川 ゆたか
成実 ゆい 柊 かがみ 柊 つかさ 高良 みゆき
嫌いなもの もずく

好物 チョココロネ 鶏肉全般

補足説明

基本的な設定は公式と殆ど変わらないが、この作品では格闘技（組み技系全般と打撃系の内の空手・カンフー・ムエタイ）の有段者である父そうじろつとたまに稽古をしてる。この作品で過去に何があった親父よ。

また小さい頃からずっと一緒だった恭平のことは、今のところ大事な家族とは思っていない、恋愛感情がうまれるかどうかは作者次第。女神によって恭平と同じく、平行世界に飛ばされる事になった。

《女神》の加護によって飛躍したステータス（あくまでも参考程度に）

戦闘適正	S	近接戦闘能力	SS	中距離戦闘能力	S	遠距離
戦闘能力	—	（出来ません）				
機動性	SS+	（場合によっては測定不能）				
成長率	SS	貧乳属性	AAA+	魔力耐性	AAA	

こんな感じ！

キャラ紹介は基本的にオリキャラとらき　すたキャラのみに行います。

キャラクター紹介オリキャラ+らき　すたキャラ？　所謂初期設定みたいな

木の精だ「こんな感じになった」

恭平「待て待て待て待て待て」

木の精だ「ん？どうした主人公キャラ」

恭平「マジ父さん（そうじろうの事です）に一体何があったんだよ！？小説家じゃなくてそっちの道進めばいいだろ！？」

木の精だ「こういうのが二次創作の醍醐味だ、早い話妄想は爆発なんだよ」

こなた「いやだからってやりすぎでしょ、公式の私やお父さん知ってる人」はあっ！？」ってなるよ！」

恭平「あとこなたの機動性が測定不能の場合ってなんだ！？」

木の精だ「そりゃ……やっぱ言わない、ばれてると思うけどネタばれになるから」

こなた「……むう、分かっではいたけどかなりチート化してるなあ、これじゃ基本楽勝なんじゃないの？」

木の精だ「安心しろ、相手も雑魚キャラ以外は強い出す気だ」

恭平「マンネリ化しないといいがな」

こなた「んじゃ今回はこの辺で」

木の精だ「ちょっと待ってくれ！悪い忘れてた！！此処だけの話一旦投稿した後に思い出して書き直した！！恭平の日本刀の名前を募集したので、何かいいのがあったら感想もしくはメッセ・ジでお願いします！」

こなた「えっと………って言う事らしいから皆そっちの辺りもよろしく！」

恭平「んじゃ今度こそ」

ALL「バイー！」

第壱訓く物語の始まりって結構意外で突然だったりする

(前書き)

木の精だ「何？夏休みの宿題多すぎる？そいつあきつと……………」

……………木の精だあああああ！！！！！！」

恭平「満足か？大将」

木の精だ「まあね、今回はかなり更新遅れちゃったよ。お盆休みの前で仕事が多すぎる」

銀時「んで今回からやっと俺達が登場か。主人公なのに三話目でつてどうということよ？」

こなた「いろいろやってたらこんな感じになっちゃったみたいでさ、やつとも物語が本格的に始まるよ」

木の精だ「それじゃあれ頼む」

こなた・神楽「さあ、始まるぞますよ？」

恭平「いくでがんす」

木の精だ・銀時「ふんがー」

新八「って真面目に始めたいんだけど!？」

木の精だ・恭平・こなた「(ツツコミキター!!!!!!)」

編集によって改行、一部改竄しました

第壱訓　物語の始まりって結構意外で突然だったりする

ここは銀魂の世界in江戸の歌舞伎町、この町には江戸一番の発明家でからくり技師であるといわれている平賀源外の工場、「からくり堂」がある。江戸一番といっても彼の場合は基本的に役に立たないガラクタばかりを作ってる訳なのだが。兎に角ただいまのその「からくり堂」では

????・????「ふんごおおおおお!!!!!!」

???「銀さん、神楽ちゃん頑張つて!!此処で吸い込まれると明らかにやばい事になるから、銀魂であつても無くてもこの展開はあからさまにだめだから!!」

銀髪の男と中華風の少女が、なんか古ぼけた机の真上に浮かんでいる、黒い球体に吸い込まれまいと踏ん張っており、その男女のうち男のほうの腰に眼鏡の男がしがみついていた、因みにこの眼鏡のほうは既に球体に背を向けた状態で全身が平行に浮き上がっており、もし手を離したら確実に吸い込まれる。

さてそろそろ人の紹介をしておこう、まず先に挙げた銀髪で、若干の天然パーマと死んだ魚のような目が特徴的な男、”万屋銀ちゃん”という何でも屋を営んでいおり、一応社長である『坂田銀時』。ただいま必死の形相で踏ん張りながら、しがみついている眼鏡の男を引き剥がしている。

銀時「俺だああ!」つか何で物語の初っ端からこんな切羽詰って

るんだよ！？リリ銀の初めは何所もつとまったりしてるもんだろ
うが！」

題名を見る、そこに答えがある。「これそういう意味だったのお
お！？いや何となく察しはついてたけどね！？（銀時）」では続
けていくとしよう、次にオレンジ色の髪を纏めてばんぼりでだんご
にしている、赤いチャイナ服の少女で”万屋銀ちゃん”従業員『神
楽』

神楽『私の事ネ！だからって経緯丸いきみごと端折ってんじゃねえヨオオ
オオ！！！！手え抜くな作者アア！！！！』

むう……、んじゃその辺は紹介終わってから改めてするとして、最
後にさつきから銀時にしがみついている眼鏡をかけた若干地味っぱ
い少年、

『田中 太郎』君。

不運な事に偶然たまたまこの二人に巻き込まれた、なんかその辺にいる可哀想な歌舞伎町の住人である。

太郎（？）「万屋銀ちゃんのまともな従業員！！志村 新八だああああ！！！！！！勝手に人の存在と名前変えんなボケエエエエエ！！！！！！」

では訂正しよう、自分で言っているように”万屋銀ちゃん”で働いている、『志村 新八』。基本的な仕事は突っ込み、そして地味だが最近は下手に”何でも出来る器用人”を目指しボケキャラも無理にやろうとした結果が 訳分^{これ}からんキャラ になってしまった、原作でもある種不遇の扱いを受け始めている彼である。

新八「要らん世話じゃあああ！！！！あと地味が仕事つてなに！？地味な仕事ならまだ分かるけど、僕地味で売ってるつもりないからね！？」

銀時「つーかいい加減離せ駄眼鏡え！！」

神楽「銀ちゃん私もう駄目かもしんないアルウウウ！！！！」

ナレーター
と此方にツツコミを披露している隙に、新八の顔面を押しつけ本気で引きはがしにかかる銀時、そしてそろそろ己の限界を感じ始めている神楽。こうしてもめている内に一度回想として、お教えしておこう、彼らがどうしてこうなったのか。話は一時間ぐらい前にさかのぼる。

《一時間ぐらい前の”万屋銀ちゃん”内》

銀時「しつかししぶといんだよなあ、いい加減打ち切れよ、パターンが同じになってきてつまんねーんだよ、ギンタマン」

リビングのソファーに寝転がり、行儀悪く足を組んでジャンプを読んでいる銀時、その向かいのソファーには気だるげに机で突っ伏している神楽がいる。

神楽「銀ちゃん、私なんか退屈アル……、何でもいいから面白い事ないアルか？」

銀時「なに言っただ神楽、世の中いや人生の半分は基本的に退屈なもんだ、だから今退屈なのは当然だ。」

神楽「まじかヨー、私今人生の半分アルか、なら仕方ないネ。」

抑揚のない言葉の会話が終わる、二人とも今はマジでやる気ってもんがない、どう見ても”ダルいオーラ”が全身からにじみ出ている。

新八「いや、朝っぱらかどんだけグダグダ何ですかあんたら。」

そこへ胡乱な目をして呆れかえった様子の新八が扉を開けて現れた。

新八「もう銀さん少しはしゃんとしてください、神楽ちゃんも。そんなんじゃ急にお客さんが来たらだらしなく思われちゃうよ?」

と銀時に注意しながら突つ伏している神楽の姿勢を半ば無理やりに正して、座らせる。そんな彼を心底鬱陶しそうに見る神楽。

神楽「ウルサイアル、大体”頼まれればなんでも引き受ける何でも屋”なんて胡散臭いコピ―、誰も信じないネ。依頼なんてそうそうくるわけないアル。」

新八「だから、そういう問題じゃなくて此れは生活習慣な事だから。ほら氣を引き締める為に顔でも洗っておいでよ」

もうある程度慣れているのか神楽の毒舌にもめげずに、ため息をついて洗面所に向けて指を刺す新八なのだが、当の神楽は見向きもしない。それどころかソファ―に寝転がってまだだらけ出す始末。

神楽「ほつといて欲しいネ、お前さつきからお母さんみたいな事言つてまるで自分が”保護者ですよ”的アピールしてキヤラを作ろうとしても今更遅いアル。所詮三日坊主になるのがオチね、新八はどこまでいつてもジミガネアル」

新八「いや人の善意を捻じ曲げて受け取ってんじゃねえよ。何でそんな捻くれてんの君は。後ジミガネってなに?無理やり新しい言葉作ろうとしなくていいから、そういうの読者は別に望んでないから」

少し口調が悪くなり始める新八、突つ込みも広く知られている雄たけび系ではなく毒舌系だ。もとよりやる氣のなかった空氣が一層どろろした物へと変わっていく。

そんな二人のやり取りには完全に無視して、”店も開く頃合だし、そろそろパチ屋で玉転がしに行くか”と体を起こした銀時が、何気なくカレンダーに視線を向けた。

―「そこで”ん?”と眉を顰める、今日の日付の所に何か書かれている、未だ神楽と新八の喧嘩は続いているので、そちらはほっとく事にしてもう一度確認する。そこにはミミスズが這ったような字で”じーさんトコへ”とだけ書かれている。

銀時「(……完全に忘れてた……そーいやなんか呼ばれてたな)おーしお前らあ、喧嘩中止だあ。ちよつくら源外の爺さんトコいくぞ」

別にシカトしても良かったのだが、どうせ今は暇だし”大方また変な機械からくりを作ったから見せびらかしたいぐらいだろ”、と考えた銀時は二人を連れて”からくり堂”に向かう事にした。

新八「でも、一体何のようなんでしょうかね？」

銀時「知るか、どーせ大した事じゃねーんだろ。」

場面は”万屋銀ちゃん”から変わって歌舞伎町の大通りになる、三人並んで歩いており新八の質問に銀時は興味なさげに答える。

神楽「大方、また新しく妙な機械からくりを完成させたから私達に自慢したいだけアル。あの爺も大抵暇アルからナ。」

新八「あはは、それはあり得るかもね。まあちょうど僕らも依頼が無かったし、それはそれで少しぐらいの暇つぶしにはなるでしょ」

銀時「ま、いざと言う時はとっとと帰ればいいだけだ、こっちはこの後玉転がしに行かなきゃなんねーんだしな」

神楽も銀時と同じ事を予想して、新八は笑う。銀時はどう会ってもパチンコに行く事はスケジュールから外れないらしい。

そうこう雑談繰り返している間に一行は目的地「からくり堂」にたどり着いた。

銀時「おーい爺さん、来たぞー！呼び出しといて実は留守でいないとかそういうベタなオチじゃねーだろうな」

銀時が中に入りながら大きな声でこの工場の宿主を呼ぶ。間も無くして薄暗い奥のほうから一人の老人が姿を表した、若干小柄な体躯と赤いゴーグルにボサボサの白髭、『平賀源外』その人である。

源外「よお、銀の字、来たか！神楽と新八の坊主も一緒ならちようどいい！」

新八「こんにちわ、源外さん。銀さんに用事って何なんですか？」

陽気に白い歯を見せて笑う源外に新八も穏やかに答える。すると源外は「応、実はな」と自信たっぷりな不敵な笑みを作る。

源外「新しい機械からくりが完成したからよ、オメー等にじっけ……
……試運転に付き合ってもらいてえんだ」

新八「いやふざけんな！アンタ今僕達に実験体って言いかけただろ
！？」

源外「ひでえ言いがかりだな新八実験体」

新八「誰が新八実験体だ！？つーか思いつきり言ってるだろ！？」

と新八が源外にキレツツコミを入れているのを他所に神楽は訳の分からん機械をべたべたと触り、銀時は逆に興味が無いのか面倒くさそうにぼりぼり頭を掻いていた。

銀時「ったく何かと思えばまたそんな事かよ。相手にすんな新八、神楽もとつとと帰るぞ。悪いがじーさん、モルモットなら他を当ってくれや」

軽いため息をつくとともに源外に背中を向けて来た道を戻る銀時、新八と神楽もそれに続く。対して源外は全くあわてるような事も呼び止めるような事も無く、どちらかというと平然とその姿を見送りながら、ポケットからリモコンのようなものを取り出した。

源外「……………
ピッ」

無造作にスイッチを押す源外、無機質な電子音なるリモコン、そして

（ウィーン、ガタガタガタッ！ガッシャン！！！！）

今まさに外に出ようとしていた銀時たちの目の前、出入り口に落ちてくる重そうで頑丈そうな鉄格子、少し銀時の靴先を掠めた。……どこに設置されていたのだろう。

銀・神・新「」……「」

三人とも胡乱な反目で鉄格子を見る、”なんでこんななが目の前にあるの？”的視線である、なんか起こった事が信じられず若干現実逃避しているようだ。

源外「さあ銀の字、こつちだ、神楽たちもついて来い」

銀時「う　おいしい　おいしい！！なに何事も無かったようにして話進めてんだあああ！！？」

神樂「今すぐ私らをこつから出せええええ！！！！工場ブッコワスぞ
糞爺イイイ！！！！」

まるでさも当然のように奥のほうへ案内しようとする源外に真つ先に我に帰つた銀時がツツコミを入れ、続けざまに神楽も怒鳴つた、因みに新八は一人鉄格子を持ち上げようと屈んで”うおおおおお！！”と気張っている。

源外「なに心配すんな、お前らが試運転に付き合ってくれたらあんなモンの開放装置ぐらいすぐ作ってやるからよ」

新八「なに恩着せがましく言ってるの！？なんで開放装置も先に作ってないんだよ！？機械からくりよかアンタの頭のネジ締めなおせ！！」

源外「元はと言えばオメー等が素直に言う聞かねーのが悪いんだろ
うが。ちょこつと付き合うぐらいの時間はあんだろ？どーせ依頼も
無くて暇してたんだろうしょ」

なんか理不尽な物言いに、持ち上げるのを諦めた新八がツツコミを
入れるが、源外の的を射ている言葉に万屋の三人組は言葉に詰まる。
事実その通りなのだから仕方が無い。

銀時「つたく、仕方ねえなあ。ホントにちょっとただでぞ。少し付
き合ったらもう終りだからな」

神楽「こんな事なら来るんじゃないかったアル」

新八「今更言っても遅いけどね……さつさと終わらせて早く帰ろう
よ」

事態がこうなった以上もう要求を呑むしかない、渋々ながら三人と
も付き合う事にした。

源外「つー訳で此れが今回わしが完成させた異空間跳躍装置弁型乙
式参拾壱号だ」

案内された小さな部屋にはよく分からないがタンクが端に幾つか並
び、そこから赤とか青のコード延びてきて部屋の真ん中に置かれて
いる、古びた机に繋がれていた。

銀時「無駄に長げえんだよ、要するになに？ターミナルと同じで、
この机で遠くにいけたりすんの？寧ろ未来や過去に行けちゃう気がする
んだけど、引き出しから青い狸型ロボットが出てくる気がする

んだけど」

新八「銀さんそれ以上の具体的内容はきっとアウトです」

因みに源外に案内されているうちにある程度の説明は受けている、早い話簡単に遠くに行ける代物を考案し、その試作品が完成したのだという。彼にしてはかなりまともな発明だ。

源外「そんじゃお前らすぐ電源入れるから、机の前に立ってくれ」

神楽「あいヨー」

少し離れた場所で壁に備え付けられたレバーを握る源外に言われるとおり、机の前に集まる三人。それを確認した源外は握っていたレバーを引き降ろした

……ガコン　ガタガタガタガタ……

何か重たそうな音が一室に響き渡る、若干の間をおいてから机の上、人が丸々入れそうな大きく黒い球体が空中に現れた。

神楽「おお！何か凄いアル！！」

新八「ホントだ、少し心配だったけど今回は大丈夫そうだね」

と神楽は素直にはしゃぎ、新八はホッと胸をなでおろすが銀時だけは訝しそくに目を細めていた、何となくいやな予感がしたのだ。

そして突然。

ピーピーピー！！

明らかに異常を知らせるような警報音が高鳴った。

源外「あ、マズイなこりゃ。」

そう源外が言い終わると同時に事態が急変する、青白い球体からさまざまな吸引力が生じて、周辺のあるもの色々と吸い込み始めた。その様はさしずめ小さなブラックホールといったところか。

新八「ギヤアアアアアアアア！！助けて銀さあああん！！」

銀時「テメーが俺を助ける！！具体的には手を離せええええ！！」

とつさの事で何の抵抗も出来ずに体を中に浮かせた新八は銀時の腰にしがみついた、銀時はそんな新八に怒鳴りながらも必死に踏ん張っている、隣にいる神楽も同様だ。

ところで欠陥品これを作った張本人の源外はというと

源外「やっぱあそこを手抜きにしたのがいけなかったなー、改良の余地ありだ」

でかいタンクの陰に隠れて一人うなずいていた。

銀時「なに一人だけ安全地帯に逃げ込んでんだ、殺すぞおお！！！！」

とまあこんな感じな事があつたわけである。

源外「おうお前らあ！もう分かつてると思つが装置が暴走しちまつてる、吸い込まれたらどんなとこに飛ばされるか検討もつかねえ！絶対に吸い込まれるんじゃねえぞ！」

銀時「んなこといつてる暇あるなら今すぐこれ止めろおお！！！」

新八「つて、銀さんなんか吸引力がさつきより上がってますよ！？」

正直気のせいであつて欲しかった酷な事にそれは現実である、そしてそれまで必死で頑張つていた一人の少女は限界を迎える、神樂の体が宙に浮いてしまった。

銀時「神樂ああ！！！」

その様を見て思わず叫ぶ銀時、だが神樂は――笑っていた、儚げに、少し満足そうに。

神樂「銀ちゃん…………ごめんアル。でも、もういいヨ、私は今日まで銀ちゃんたちと万屋やつてこれを楽しかったアル。ここで終わっても何も後悔なんてないネ。…………だから…………ここでさよならネ。」

まだ年端も行かないような少女は、その言葉にして笑っていた。どこか寂しげに悲しげに

銀時の腕掴みながら。

銀時「さよならしろオオオオ！！！！！！」

神楽「アホかああああ！！私だけ飛ばされるなんてイヤネ！！お前も一緒だ天パああああ！！！！」

一気に表情が一変して必死の形相で銀時の腕にしがみついている神楽、何が何でも銀時も一緒に巻き込むつもりだ。

銀時「お前らマジいい加減に……って、あ！？」

そもそも新八一人でギリギリだったのにそこに神楽の負担も加わっては踏ん張りきれはるはずもない、銀時の体も続けざまに宙に浮いた。

銀時「ふざけんなああああ！！」

銀時は怒り心頭の大絶叫を

神・新「よつしゃああ！！ザマミロオオオオ！！！！」

神楽と新八は勝利の雄叫びをあげ、ものすごい勢いで黒い球体に吸い込まれていった・途端にそれまでの事がウソのように某素が止まる装置。

それを見て源外が

源外「まあ、あいつらなら大丈夫だろ」

と無責任な発言をした。

『?????内』

場所はまた変わって一本の道、もとい廊下になる見た目は中世のヨーロッパ辺りの城、もしくは宮殿を思わせる石造りである。日は全く差し込まないように壁に窓は一つもない、明るいとは言えず備え付けられている燭台の灯りだけが進む先の道しるべである。

その廊下を紅いローブを羽織い、青い瞳をした金髪（因みに長さは肩から少し先くらい）の青年が歩きその少し後を漆黒の甲冑に身を固めた騎士のような人物が続く。

金髪「全くあの娘達にも困ったもんだねえ、もう少し融通って言うか我慢って言うモンを覚えて欲しいもんだけど」

金髪の、外見では青年と呼べる歳の男が軽い口調で話すと、それに追従するように歩いていた黒い甲冑騎士は

黒騎士「……………しかし宜しかったのですか？あのような期日など」

まさに主君に対するような礼儀正しい、堅い言葉で返した。

金髪「いゝのいゝの。もしそれまでに潰せるならそれでお願い。潰せ無かったらそれはそれで面白いでしょ？君も”彼女も”どうせなら手応えのある相手のほうが嬉しいだろうしさ。」

黒騎士「……………其れは」

間延びしたような緊張感のない主の言葉の中に、凶星があるのか若干言いよどむ黒騎士、二の言葉が出る前に金髪の男は優しく笑う。

金髪「遠慮しなくていいよ？君や”彼女”が僕を主としてくれるように、僕も君たちのことはちゃんと考えるさ。まあ、とりあえず最初は相手さんの力がどんなモンか其れだけを知っておこうよ」

黒騎士「それで”彼女”を？」

確認するように尋ねる黒騎士。

金髪「ん、”彼女”も基本いい子だからね、与えた眷属達で力を図るだけにすると思う、仮に自分が戦うとしても、言いつけを守ってくれば相手がどうであれまだ終わる事はないと思うよ。後君にも、時が来たら動いてもらうからね？頼りにしてるよ？」

黒騎士「御意」

それから二人は特に会話をするでもなく、廊下を歩きながら先の見えない闇の中に消えていった。

『あ、それはそうと今度あれやってよ、「この剣を使われよ」ってやつ』

『……………どうか其れはご勘弁の程をお願いします』

そんな言葉を最後に残して。

第壱訓く物語の始まりって結構意外で突然だったりするく

(後書き)

木の精だ「しかし小説書くのってほんと読むのとは大違いだよな
あ、やりだす前まではもうちつと上手く出来ると思ってたんだが」

恭平「何いきなり黄昏てんだ駄作者め」

こなた「やつと始まりだしたってのに弱音吐かないでよね」

銀時「ちつたあやる気出せよ、読者が減るぞ、元から少ないけど」

神楽「そんな事だから更新もやたら遅いアル」

新八「……………orz」

木の精だ「ん？他の連中がボロクソ言ってきたのになんではつつ
あんだけ凹んでるんだ？」

銀時「オメーのせいだろ、自分で書いた内容見直して来い！」

木の精だ「あ、成る程な。でも訂正する気はない」

新八「ちつきしよおおおお！！どうせ僕は半端キャラだよおお！
悪いかゴラアアア！！！！！」

恭平「おお！！血涙ってホントに流れるんだな、始めてみた。で、
あいつは走りながらどこに行くんだ？」

こなた「どこかの別世界の自分には彼女が出来てるから其れを見て

自分慰めるんだって」

神楽「あ、誰の作品の事が分かったアル」

こなた「あんまりうかつな事はいえないけどね」

恭平「特に今回は他に言う事はないしな…、大将そろそろ締め頼む」

木の精だ「了解、とりあえずようやくここから物語が始まります、
文才のない自分の作品ですが、これからもお付き合ってください!!」

銀時「次回！リリカル銀 すた第貳訓！夜更かしは大人の特権だと思いたい！テイクオフだ！」皆、ぜってー見てくれよな！」

神楽「銀ちゃん其れ誰のまねアルか？」

こなた・恭平「それでは」

ALL（新八除く）「バイー！！！！」

銀時「んじゃこなた、あれ頼むわ」

神楽「いつもどおり決め手やるアルね！」

こなた「おk！ さあ、始まるぞますよ？」

恭平・銀時・フェイト「「「いくでがんす」」（フェイトのみ赤面で声が小さい）「「

神楽・アルフ・木の精だ「「「ふんがー」「「

太郎「真面目にはじm……………っておいしいiiiiiiiiiiii！！！！！」
↑ かつての新八です

第貳訓　夜更かしは大人の特権だと思いたい

あの黒い球体に飲まれてどのくらいの時間がたったのか、其れは定かではないが

「ん」

ゆっくり瞼を開けて銀時は目を覚ました。

「ん？」

一体何時の間に寝てしまっていたのか、とりあえず体を起こす。周りを見渡した。どこかのビルの屋上らしい。そして空は暗く月が出ている。

そして新八と神楽の姿はあらず。

「どう、どう？」

銀時は訳の分からなさ、思わず引きつった笑みを浮かべて誰ともなしに呟いた。

「アルフ。あの人誰なんだろうね？」

突然、屋上に現れた銀時を空から見下ろしながら金髪の少女が隣に

いる女性、桃色の髪をした『アルフ』という人物に話し掛ける。

「さあ？管理局の魔導師……なのかな？」

アルフは首を傾げた。

「…何かおかしな恰好をしてるね。管理局の魔導師には見えない」

二人は銀時の恰好を見た。見た目からして魔導師には見えない。バリアジャケットを着てないし、杖も持っていない。

「どうするフェイト？」

『フェイト』と呼ばれた金髪の少女は手に持つ杖を強く握った。

「捕まえよう。あの人には悪いけど」

「わかった。次元転移による魔力は全く感じなかったから強敵かもしれない。気をつけてねフェイト」

「うん。アルフもね」

アルフにそう返して、フェイトは手に持つ杖『バルディッシュ』を起動させる。

「私が初撃で誘導するから、アルフは捕縛用のバインドで捕まえて」

「了解！」

銀時「まったく、何処なんだよ此処は……。確かあの機械に吸い込まれたって処までは覚えてんだけどな」

銀時は腕を組みながら屋上をうろろして、何とか現状を確認してみる。良く分からないがああ機械のせいで何処かに飛ばされてしまったようだ。町並みも良く見れば江戸の其れとはかなり異なる。

銀時「だー！もう、こうなっちまったのも全部あの爺のせいだ！！今じゃあんなに綺麗な星空さえイライラする！！新八も神楽もここいったあああ！！？」

やり場のない怒りを空に向かって放つ、怒鳴ったところで何も変わらないのだがそれでもやらないと気が済まない。一方でその背後の上空からフェイトとアルフ迫ってきていることに銀時は気づいていない。

フェイト「（……ごめんなさい）」

フェイトは心の中で謝りながら数発の黄色い魔力弾を銀時に撃ち放った。

銀時「！！」

銀時は凄い速さで迫ってくる魔力弾の光に気づき、振り向きざまに腰に差していた木刀『洞爺湖』を抜く。そして迎え撃とうとした瞬間、

（ カッ！！ ）

と銀時の頭上で白い光が瞬いた。

銀時「っ！？眩しっ！」

フェイト・アルフ「！？」

突然のことで銀時のみならずフェイトとアルフも目を見開いた。そして光はその一瞬ですぐに収まり、

恭平「……ってこれはもしかして落ちるパターンですかああああ！？」

銀時「おぶおおお！！」

その光があつた場所から一人の黒髪の少年が現れ、かと思つたら途端に落ちてきた。名前を見れば分かるように何を隠そう深海 恭平である。

そして落ちてきた彼に反応できずに下敷きになる銀時、二人の男は重なるようにし倒れ込んだ形になる、そして無事であつたフェイトの魔力の弾達は当然そんな彼らの真上を通り過ぎていき、離れた場所に炸裂した、コンクリートタイルが碎ける

フェイト「……………」

アルフ「……………えっと」

先に攻撃したフェイトも、その後に捕縛しようとバインドを発動し

ていたアルフも啞然とする。こんな時どいう反応かあをしたらいのかちよつと分らない。笑えがいいのだろうか？

とりあえずもう一度上空で距離をとって様子を見ることにした。そしてそんな疑問を女性陣二人が抱いているうちに、上に倒れていた少年が先に起き上がる。

恭平「あつただだ……、あの女神バカ今度あつたらぜつてーシめる。……って今はそれどころじゃねーんだつた。」

と頭を抑え、顔を顰めながらこんな飛ばし方を女神バカを思い浮かべてため息をつく、もう少しましなやり方はなかったのだろうか、今度会う事があれば必ず復讐することに誓いを立てる。が、すぐに其れよりも大事な事を思い出す、なんか落ちたときに変な声を聞いたような気がする。其れもすぐ近くで。

もう一度さつき自分が倒れていた場所を見る、案の定そこにつつぶせになってぶつ倒れている男が一人、しかもよくよく見ると自分が好きなあの漫画の主人公にそっくりだった。

女神から受けた説明を思い出して、苦笑いを浮かべながらその男の体をゆする恭平。

恭平「あゝ……、まずは起こして謝らないとな。おゝいとりあえず起きてくれぎん……白髪で天パな人ゝ」

銀時「……ん？……ん……？……あれ、なんかデジャブなんだけど？後お前一体誰？」

多分だがまだお互いを知らないうちから名前を呼ぶのはNGだと思いい言い直す恭平。

声をかけられながら体をゆすられ、銀時は再び目を覚まし、何となくの概視感を感じながらも目の前の少年に尋ねる。

恭平「おう、俺は深海　恭平だ、恭平でいい。何か全然現状分かってないこんな状況な訳だけどよろしくな、白髪頭の人！」

銀時「恭平ね……宜しくな、あと白髪頭は止めてくれない？俺には坂田　銀時っていう名前があるんだしさ」

恭平「（……………やっぱりね）あいあい、了解したよ銀の大将」

銀時「……………随分斬新な愛称だなおい」

よく分からない状況にいる二人なのだが、兎に角自己紹介として名乗りあい、恭平は人懐こい笑みを見せて、今まで聞いた事のない呼ばれ方に銀時の方は苦笑する。しかし銀時ははつとした顔になって慌てて倒れたときに落とした木刀を拾った。よく考えれば和んでる場合じゃない。対して恭平の方は事情が分かっていないので首を傾げる。

恭平「？……………どつたの大将」

銀時「いや…………俺もよくわかんねーけど、もしかしたら今の俺達あんまり良くない状況かも知れねえ…………」

恭平が落ちてくる寸前に、恐らく自分を狙って放たれてきたあの黄色い弾幕の事を思い出して、周りを油断無く見回しながら銀時はそう答えた。

フェイトとアルフは上空で男二人ののやり取りを見ている、気づか

れる前に一旦離れる事が出来たがこれからどうしたものか。少し距離があるので男達の会話はあまり聞こえない、だがどうやら互いに初対面であるようだ。

アルフ「なんか、妙なのが増えちゃったね……もうこのまま無視してジュエルシード探しに行きたいけど」

胡乱な半目でアルフは盛大にため息をついた、正直なところフェイトも若干そう思う。だがそうもいかない、どちらの男も恐らくこの世界の人間ではなく別の次元からやってきたわけで、時空管理局の魔導師なのかと思ったがそのくせ魔力を感じない。どうにも不思議な人達だ。

フェイト「……とりあえず私だけで話をするよ。管理局の人じゃないかもしれないし、アルフはもし管理局だった時の為にバインドを準備しといて」

アルフ「なっ……危ないよ！？相手は二人いるんだよ、しかも男なんだ。それなら私が行くよ！」

フェイトの提案にアルフは危惧する、フェイトはこの歳で凄腕の魔導師だが、だからといって訳の分からない連中にいきなり向かって欲しくは無かった。魔力こそ無いみたいだがそれでも心配なモンは心配である。しかしフェイトは小さく微笑んで答える。

フェイト「ありがとう、アルフ。でも、大丈夫だから……バインド宜しくね」

そういうと金髪の少女魔導士は二人の男の元へとゆっくりと降りて行き、アルフもまたため息をつきながらもその二人の近くの物陰へ

と高度を降ろしていった。

恭平「なるほどねえ……………んなことが（……………黄色の魔力弾ってことは……………フェイト……………か？）」

銀時「ああ、もう銀さんビックリだよ。唯でさえ糖分不足と訳わかんねえ場所に来て苛々してたのに、そこにいきなり誰かから攻撃されるわ人が真上に落ちてくるわ、ビックリ現象はこれ以上ねーだろうな？」

お互いに背中を預けた状態で銀時と恭平は臨戦態勢の構えを取っている、明らかに面倒くさそうに半目で愚痴る銀時、恭平は恭平で仕掛けてきた相手が誰か大体察しがついている。

フェイト「……………あの……………」

恭・銀「ン…………？」

とそんな二人に少女が一人上空から降りてきて声をかけてきた。言わずもがなフェイトである、自分達のすぐ近くに着地した少女を銀時は……………特に驚くことなく額に手を当ててため息をついた。

銀時「本日三度目のびっくり現象だよ……………今度は飛。石を持った口リ少女が現れたってトコか？」

恭平「大将なんかこういうこと呼び寄せる資質か才能でもあるんじ

やないの？まるで主人公だねえ「んなモン願い下げだバカヤロー」
……全くだよな（ボソツ）」

フェイト「……あ、あのっ」

恭平「おお、ごめんな。んでなんだい？」

なぜか無視されているような気分になってあらためて声をかけるフェイト、何となくだがこのままだとずっと放置されるような気がした。その呼びかけに恭平は苦笑しながら答える。

フェイト「貴方達は……管理局の人間なんですか？」

もしそうならば戦闘は避ける事が出来ない、手にしたバルディッシュを強く握り警戒した面持ちでフェイトはたずねる。しかし

銀時「はあ？管理局？なんだそりゃ？」

フェイト「……え？」

恭平「（あゝ大体時代設定分かってきた）……銀の大将きつとあれだよ。飛。石を狙ってやたらしつこく付きまとってくるくせに終り方は随分あつけないあの「…多分それ……違います」……ありゃ」

予想に反した疑問系の銀時の答えと想像だにしなかった外的な恭平の解説にフェイトは驚いた、同時に若干警戒が緩む。

銀時「てかお前、何その格好は？コスプレか？まあ人の趣味にあれこれ口は出さないけどさ。恥ずかしくないの？」

恭平「んゝまあ似合つてるといえば似合つてるし、俺は悪くないと思うけどな。……つか大将も人の事いえないんじゃないの？」

フェイト「……うう……変……なのかな？」

このときのフェイトの格好は黒いマントを羽織っており、黒のニーソックスに同じ色のグローブと続いて着ている服までどこか衣装的だ。これはフェイト達言うバリアジャケットという、簡単に言うとな魔力で構成されている鎧なのだが銀時はそんな事知らない。自分の格好を指摘されてやはり可笑しいのだろうかと羞恥心でうつむき顔が赤くなっていくフェイト。

フェイト「え……あ、うん……大丈夫。出てきていいよ」

ふといきなり独り言のように呟きだすフェイト、その様子に首を傾げる銀時。とすぐに近くの物陰から新しく一人の女性が姿を現した。

アルフ「フェイト、そいつら本当に信用できんのかい？変な事とかされてないだろうね？」

恭平「（やつぱりアルフだよ……リアルで見るとやつぱ相当美人だねえ）……大将、今度は犬のコスをした人が現れたよ」

アルフ「誰が犬だ！？私はこれでも立派な狼だ！！」

銀時「いや違いわかんねーよ。もういいじゃんかお前この際犬で」

アルフ「いい訳あるかぁ！！」

出会い頭に失礼な事を言われて怒り出すアルフ、そこに銀時が更に

火に油を注ぐような事を言ってアルフが一層叫んだ。

フェイト「ア、アルフ、落ち着いて！」

荒れるアルフをフェイトがなだめて、場はなんとか落ち着いた。

フェイト「じゃあ貴方達は気がついたら此処にいたんですね？」

銀時「ああ」

恭平「いきなり白い光がピカッ！ってなかんじだよ」

銀時と恭平はフェイトとアルフに事情を説明した、勿論恭平は女神との出来事を隠しているが。

アルフ「フェイト。コイツら『次元漂流者』かもしれないね」

銀・恭「『次元漂流者』？」

アルフの言葉に銀時は片眉を上げた。

フェイト「簡単に言えば迷子です。未開の世界から何かの拍子で別の世界に飛ばされた人間の事です」

とフェイトが答えた。

銀時「成る程な……通りで江戸とは違うはずだ」

銀時はフェイトの言葉で得心が行く、建物の形などが江戸の建物と少し違うし、ターミナルもない。それに街を歩いてる人をよく見ると天人が一人もいない。それでも念のために確認だけはする。

銀時「なあ地図持ってねーか？」

フェイト「地図？」

銀時「ああ」

言われてフェイトは銀時に地図を渡した。銀時は渡された地図を見る、恭平も随伴して覗き込んだ。そこには銀時には知らない地名ばかりが書いてあった。

銀時「やっぱりかよ……あの爺」

恭平「んゝ俺の方は大体あつてるねえ、地理的には結構共通してるっぽいな」

地図を見終わった二人はそれぞれの感想を口にしてフェイトに其れを返した。心なしか銀時はげんなりしておりフェイトはそんな彼を心配そうに見る。

フェイト「あ、あの……大丈夫ですか？」

銀時「あ、ああ。大丈夫だ」

フェイトに銀時は力なく笑うが心奥底ではこうなってしまった事の張本人源外に復習する事を考えている、そんな様子の銀時にアルフ、フェイトは困惑し恭平は苦笑していた。

恭平「あ、そうだお二人さん、青くてやたら長い髪をした、ついでにアホ毛も混じってる少女を見たこと無いかい？ 泉 こなたって言うんだけどさ」

銀時「あ、それなら俺も志村 新八と神楽って奴ら聞いた事無いか？」

フェイト「新八と神楽……それにこなた？」

アルフ「誰なんだい、そいつら」

ふと恭平と銀時自分達の連れの事を思い出して尋ねてみるが、フェイトもアルフも小首を傾げるだけである、あまり言い返事は期待できそうに無い。

恭平「かけがえの無い、大事な家族だよ。きっとあいつも此処に来ているはずだけど、どういうわけかはぐれちゃったようだね」

銀時「こっちも似たようなもんだ、此処に来るまでは一緒だったんだけどな」

二人の言葉にフェイトたちは申し訳なさそうな表情を作る。

フェイト「ごめんなさい……分からないです」

アルフ「私も……心当たりが無いね。力に慣れなくてごめんよ」

恭平「嫌々、気にしないでいいって。あいつもきつと上手い事やってるだろ」

銀時「ま、あいつらの心配なんてするだけ無駄だしな。こつちの事も気にすんな」

と二人の謝罪に軽く笑って済ませる銀時と恭平、その様子に少し安心したのか微笑を漏らすフェイト。

フェイト「あの、二人はこれからどうするんですか？」

恭平「あゝそっぴやどうすりゃいいんだろ？」

銀時「いわれりやなんにも考えてなかったな、…………宿…………すんげー早くから抜けだしや何とかなるか…………？」

言われてこれからの事に関して考え出す恭平と銀時、なんか銀時の発言に危ないものを感じる。何する気だアンタ。

フェイト「…………あの」

銀・恭「ん？」

私達の家でよければ泊まっていけますか？」

と、フェイトが銀時達に提案した。

銀時「えっ？いいのか？」

恭平「こつちからしちゃこの上ない、ありがたい提案だけど」

フェイト「はい。いいよねアルフ？」

フェイトは隣にいるアルフを見た。

アルフ「まあフェイトがいいならいいけど。それにコイツ等悪い奴等には見えないし」

アルフもフェイトに同意する。

銀時「いいのか？素性も知らねえ相手をそんな簡単に家に泊めて」

恭平「自分で言うのもなんだが得体の知れん様な男達だよ？俺もこちの大将も」

フェイト「はい。アルフも言ったけど、貴方達は悪い人には見えませんから」

フェイトは完全に警戒を解いてバルディッシュをしまった。

銀時「そうかい。なら少し世話になろうかね。あつ、そっぴやあ自己紹介がまだだったな」

銀時はコホンツと咳をした。

銀時「俺は坂田銀時。元の世界じゃなんでもやる万事屋つてのをやってんだ」

恭平「んじゃ俺も。俺は深海 恭平だ。職業は普通の高校生！好きな風と呼んでくれ」

フェイト「私はフェイト。フェイト・テストロッサ」

アルフ「あたしはアルフ」

フェイト達も自己紹介する。

銀時「まあよろしく頼むわフェイト。アルフ」

恭平「何か頼める事があるなら遠慮なく頼ってくれな？」

銀時は頭を掻きながら、恭平は銀時にも向けた人懐こい笑みで二人に言った。

フェイト「は…はい」

フェイトは少し顔を赤くして頷いた。

アルフ「よろしく」

アルフは笑顔で返事をした。

「????」ふむ………会合をなした………か。…早速で悪いがその力…
…確かめさせてもらっぞ。黒の特異存在^{イレギュラー}」

フェイトたちがいた更に上空から、四人の様子を最初から最後までずっと”見ていた”漆黒の甲冑を纏った少女の存在に、誰かが気づく事は無かった。

第貳訓　夜更かしは大人の特権だと思いたい（後書き）

木の精だ「うゝんなんか足りないんだよなあ」

恭平「今回も無事終わったのにどうした大将。藪から棒に」

こなた「いや、なんか他の人の作品呼んでてなんかかけてるような気がしたんだって」

銀時「文才だろ」

神楽「文才アル」

こなた「文才だけどね」

アルフ「文才なんだよねえ」

恭平「あのなあ……皆それしかいえないの？」

銀時「ん？じゃあ恭平は他に何かあるって言うんだ？」

恭平「っ”銀八先生”」

ALL「あゝ……………（納得いったように息漏らす）」

木の精だ「っわけで次回からおまけコーナー設置します。基本質問とかにお答えするので、何か質問があれば感想までお願いします！

第参訓く別の世界の人から見たら自分だって十分おかしいく（前書き）

木の精だ「夏休み終わってしまった？そいつあきつと……………」

木の精だああああ

あああああ！……！」

恭平「飽きないな、大将も」

こなた「それはそうとしてこの小説もはや6作目、いい加減私やなのちゃんに出番まわして欲しいんだけど？」

神楽「私の存在は忘れてるんじゃない？だろーナ？さっさと書いて登場させるアル」

木の精だ「んく大体のストーリーは頭の中じゃ出来上がってんだけどいざ書くとうまいように進まないんだよね」

恭平「もうちょい頑張りなつて、それじゃこなた」

こなた「あいよ。恒例のあれ行くよ」

こなた・神楽「さあ、始まるぞますよ？」

恭平「いくでがんす」

木の精だ・銀時「ふんがー」

新八「って真面目に始めたいんだけど!？」

第参訓く別の世界の人から見たら自分だって十分おかしいく

満天に煌く星空の下、奇妙な形であつたアルフ、フェイト、銀時、恭平の四人はのんびりとした歩調でフェイトが住んでいるというマンションへと向かいながら、それぞれの世界の事について話していた。因みに横一列に並んでおり左から順に恭平・銀時・フェイト・アルフである、至極どうでもいいが。

アルフ「へえ……………銀時の世界じゃ宇宙人のこと天人って言うてるんだ……、その辺からしてこっちは大分違うね」

フェイト「うん……あとバイクより早く走れる忍者とか、ものすごく大きい犬とかその機械からくりつていうのも聞いているだけでも面白い」

恭平「他にもマユゾンとかいったけ？なんか俺の世界じゃ考えられないような事態がてんこ盛りだな。刺激が多そうでうらやましい」

銀時「つつても当事者になつてみると結構洒落にならねーんだよ。良い子は真似すんじゃないぞ」

銀時がいた世界の事を三人は興味に聞いているが、話す本人はうんざりしたようにため息をついて、言い聞かせるようにフェイトの頭を軽くなでた。フェイトは少し頬を赤らめるもおとなしく其れを受けている。

銀時「俺からしちや恭平の世界の方が羨ましいけどな？随分平和そんな生活を満喫してたみたいじゃないの」

恭平「まあな、多分そつちじゃ縁遠いまつたりとした様な生活を送

つてたね。よもや自分がこんな事態に陥るとかマジで想像も……
いや、あればいいなとは思ってた……かな？」

フェイト「あ、あははは」

アルフ「あんたは普段なに考えて生きてるんだい？」

恭平のオタクな発言に苦笑うフェイトと呆れるアルフ。そんな恭平も肩をすくめて苦笑する。

恭平「ま、尤も本気で巻き込まれるとは思ってなかったけどね。あくまでも願望とか憧れとか、そんな感じで実際には絶対にありえないなーって昨日までは思ってた」

銀時「現実見れてんのか夢ばかり見てんのかどっちだ？」

半目で呟く銀時。

恭平「それよかフェイト達の事も教えてくれよ、そもそもあんなとこで子供といん……狼だからね？」……狼が何してたんだ？フェイトぐらいの子が外で遊ぶにゃちよいと遅い時間だぞ？」

銀時「あ……、そーいやそうな。ガキがそういう遊びを覚えるのは十年ぐらい早いだろ？それともアルフの散歩の途中かなんかだったのか？」

言葉の途中で狼のお姉さんからの低い声が割り込み、言い直しながらフェイトたちに恭平は尋ね、銀時もそれに乗っかってきた。其れに対してアルフとフェイトは互いに目配せすると、アルフが苦笑しながら口を開く。

アルフ「だから、私は狼だって言ってるだろ？ちよつとした探し物
つてところだよ。あそこでであったのは単なる偶然さ」

銀時「探し物？なにになにに、これになるモンだったりするの？銀
さんもチヨビツとぐらいなら手伝ってあげるから分け前少しよこし
なさい」

フェイト「え……………えつと別にお金になるものじゃないんだけど」

銀時「心配すんな、銀さんに任してくれたらじつちゃんの名にかけ
て速攻で見つけてやる。だから報酬は五割でいいぞ？」

アルフ「……………いや人の話聞いてくれてる？別に金銭的なものじゃ
ないんだって」

「これになるモン」のくだりから片手指で円を作り、銭を主張する
銀時、その表情は薄ら笑いを浮かべていて若干いやらしい。困った
顔になって言いよどむフェイト達に見かねたため息について恭平が
口を挟む。

恭平「ちよつくら落ち着いてくれ大将。詳しく言いたくねえってん
なら今はそれでいいじゃないの。ただなフェイトにアルフ」

と恭平は一度言葉を区切って優しく微笑んで、フェイトたちを見
る。

恭平「俺も銀の大将もお前さん達に世話になる身なんだ、なんか手
伝えそうな事があるなら力になりてえ……………ってな事を大将も言いた
いんだよ。こう見えて多分この人ツンデレさんだからね」

銀時「うるせえよ」

途中までは良い表情だったのに最後でまたおどけた顔になって銀時を指差し、直後にその人から脳天にチョップを叩き込まれる、”ゴスツ”という鈍い音がしてその場でうずくまる恭平。フェイトもアルフもどんな表情を作ればいいのかわからずに、とりあえず苦笑してみる。

銀時「氣い取り直して次の質問な。ふと思ったんだけど俺がさっきビルの屋上にいたときに向かってきたあの光の弾を撃ったのはフェイトなんだろう？ああいうのってこっちの世界じゃ誰でも使えるのか？」

アルフ「あゝいや、別にそういうわけじゃないんだよ。寧ろ稀なくらいでさ」

フェイト「私は魔導士なんです」

銀時「魔導師？」

フェイトが出した聞き慣れない言葉に銀時は首を傾げる。

フェイト「魔力を用いて魔法を使う人間のことを魔導師と言います。ただこの世界では魔法に関しての技術が全く進んでいません。だから魔導士の存在は殆どないと思います。」

銀時「成る程な、それじゃさっきお前が持ってたあの黒い……斧か？アレは何なんだ？つーかあれどこいった？さっきまで持ってたよな？」

フェイト「…この子の事ですか？」

銀時の質問にフェイトは首から提げている、三角形のペンダントを軽く持ち上げる。その意味が分からず怪訝そうな顔で頭に疑問符を浮かべる銀時。

フェイト「この子はバルディッシュ……、私のデバイスです。魔導士はデバイスの力を借りる事でより強力な魔法を扱う事が出来る……、普段はこの形ですけど魔法を使うときとかはさっきの形状に変化します」

恭平「（やれやれ、アニメ見てるときは露ほどにも思わなかったけど、マジ冗談みたいな世界に飛ばされたな俺も）……すごいファンタジックだよな。ってことはアレか、やっぱりアルフもその魔導士ってやつなのか？」

アルフ「いんや、私はフェイトの使い魔さ……ちゃんと説明したげるから」また訳のわからねえ単語が出てきた”みたいな顔しないでくれよ銀時」

銀時の表情を見て、アルフは苦笑すると得意げに人差し指をピンと立てる。

アルフ「私ら使い魔っていうのは魔導士が作り出して使役する事が出来る、魔力で出来た人工の生命体でね。その能力は主人である魔導師に比例されるよ。因みに私はこれでもかなり性能は高い方だよ」

恭平「銀の大将、理解できてますかい？因みに俺は大体把握できた」

銀時「……………とりあえずフェイトが凄い奴だって事は分かった」

恭・アル「……………はあ」

二人して今日何度目になるか分からないため息をついた。

『同刻 海鳴市上空』

金髪にして漆黒の鎧を纏った少女が腕を組んでいる、フェイスマスクのような仮面をつけているので表情は見えないが恐らく無表情なのだろう。

「……………マスターの命令では出来るだけ殺さないように……………か。まずは結界を……………後に眷属どもをだな。……………この程度の事で終わらんだろうな？^{イレギュラー}特異存在」

口調も無機質気味な彼女はゆっくりと手をかざせば、静かにそこに黒い霧が集まり一つの形を作り出す。造形されたのは彼女の鎧と同じく黒に染色された一振りの両刃の剣、刀身に血の様な紅い紋様が刻まれている。彼女は其れを上段に構えると

「……………っ！」

一息に振り下ろす。同時に彼女を中心にして目には見えない波紋が周囲に広がる、その周辺で”なにか”が変わった。

side： 恭平

アルフ「なんか聞けば聞くほど恭平がいた世界は平和だねえ……いや一番それがいいんだけろうけどさ」

若干呆れたようなアルフの言葉に俺は苦笑を浮かべる、寧ろこつちリリなのの世界の方が異常なくらい物騒なんだけどな。

恭平「ま、毎日が何も起こらず平凡だったからね。色々頑張ってる大将やフェイトたちからすりゃ拍子抜けするほど退屈な世界だろうよ、その証拠に——っ!？」

……え？なに？何なの今の？気持ちが悪い………違う、違う、違う違う違う、今の今までは当たり前で普通だったけど今は違う！何かが今絶対変になった、気のせいなんかじゃない！

アルフ「フェイトッ!!」

フェイト「うんっ!」

フェイトとアルフの鋭い声のおかげで我にかえることが出来た、見ればフェイトはいつの間にかバリアジャケットを纏っていてバルデッシュをセットアップしていて、アルフも隠していた耳と尻尾を出して俺と大将を守るように前に立っている。現実に戻れたのはいいけど相変わらず気持ち悪い不快感は全くぬぐえない、マジ何なのこの感じ。

銀時「………んで？恭平、その証拠に………なんだって？」

銀の大將も相変わらずの死んだ魚のような目線で、今自分達が立っている道の先を見据えながら腰に刺している木刀を引き抜いた。街灯で照らされているアスファルトの地面に黒い”何か”現れる、うん正直よく分かんない。なんか円を描いて地面にへばりついてた感じだから影っていうのが最もらしいと思う。兎に角其れが出てきてすぐに形を作り初める……………うわぁキモい。何となくバトルの予感もするから俺も臨戦態勢の構えを取った。

恭平「……………ああ、その証拠にさ……………俺がいた世界じゃあんな珍妙な動物達はいなかったよ？」

形を作り終えた、影だったそいつらは「異形」って言葉が似合っていた。四速歩行で狼が虎辺りをモチーフにした、不気味な白目以外全身真黒な見たことも無い化け物だ。原作でも無かったよなこんな展開は。

アルフ「恭平と銀時は、危ないから下がっていなよ？」

フエイト「私とアルフが、二人を守ります……………！」

なんて凄く頼もしい事を言ってくれる二人、どうやら俺達の様子は気づいてないようで注意は狼もどき、虎もどきに向かっていているようだ。今さっき知り合ったような奴ら相手にそこまで気にする事なんて無いのに、揃ってお人よしだよこの主従コンビは。小さく息を漏らして銀の大將にチラリと視線を向ければ、——軽くうつむいて頭をぼりぼりかいていた。あー俺と同じ事考えてるな、この人きつとがんばるつもりだよ。

恭平「気持ちは嬉しいけどね、流石に女の子に守られるってのは男の子の沽券に関わってきちゃうんだよ、これが」

銀時「まったく、新世界に飛ばされてもこういうことに巻き込まれちゃうのね、俺って」

言いながら大将と揃って振り返る、何時の間に沸いて出ていたのか着た道にも似た様な化け物が現れていたなんか牙むき出しにしながら「グルルル……」とかつて低く唸っているしどう見ても好意的な表現していない。銀の大将とフェイトたちがなんか会話してるようだけど、今は其れに加わろうとは思えない、依然気持ちの悪い感じは続行中、唯何となく分かるのは今いるこの空気の感じも気持ち悪いけど、目の前の獣達の方がもっとキモチワルイ

見た目じゃないんだ、所謂存在が凄くいやだ。昨日まではこんな感じ取れる様な俺じゃなかったけど、今は分かる。先頭にいた狼もどきが一匹こつちに突っ走ってくる。

フェイト「恭平っ！」

アルフ「銀時っ！」

後ろからお人よしズからの叫びが聞こえる、構わず俺は軽く息を吐いて目を瞑る。意識せずに口端がつりあがるのを感じるが止めない。

恭平「この気持ち悪い感じのは……」

目を瞑っていても相手がどれだけ迫ってきているかが正確にわかる、まあこれぐらいは元の世界でも出来た。

恭平「お前ら全部潰すと……」

目を開けたときには跳躍し、眼前にまで迫ってきていて大口を開い

ていた狼もどき、それが届く前に俺は握り締めた拳を、狼もどきの顔面もろとも

恭平「消えてくれるのかねえっ!!」

硬い地面に叩き込んだっ――!

くおまけく

銀八「教えて」

生徒共「銀八せんせい!!」

銀八「はい、前回の後書きにあったように今回から始まりましたこのコーナー、質問があれば先生とアシスタントが出来るだけ、てきとー且つスムーズにお答えします」

恭平「今回のアシは俺とこなたね、そいじゃ一個だけだけどいつてみようか」

こなた「ペンネーム「黒龍」さんからの質問だよ」

1・質問ですが、そっちの銀さんもこっちの銀さんのようにハーレム作ったりするんですか？

2・そっちの新八はこっちの新八のようにアニメオタク&mp;ロリコンに成り下がってしまうんですか？

3・恭平は銀魂以外ならなんのアニメが好きですか？

銀八「それじゃあ順にずばりお答えします、先ず最初の質問は作者曰く”そうするつもり”らしいです、誰とフラグを立てるかは模索ty……あー！なんか腹立ってきた！！何でこのシリーズは確定してあいつがモテる事になってるんだよ！！次だ次！！」

こなた「二番目の質問は私が答えるね、……………ぶっちゃけ決めかねています。一応アニメオタだけは外す気はないんだけどねえ、元が地味過ぎるなだけに変にキャラいじくったら目も当てられない事になりそうでき。兎に角この質問の回答は”アニメオタとして生きていきます”という事で」

恭平「最後の質問は当然俺だな、俗に言う燃えアニメが大好きだ！真ゲッターにグレンラガン、スクライドは勿論ワンピースやNARUTO、ドラゴンボールやジャイアントロボ（ってこれは知らないか？）その他諸々の燃えるようなアニメが好物だな、もちろんリリなのも好きだぞ！」

銀八「つーわけでこんな感じで以上です。「黒龍」さん廊下に立ってなさい」

こなた「初めてのコーナー緊張したね……………其れはそうと私の出番マダー？」

恭平「もうちょいさきみたいだ、其れまで我慢してな？」

こなた「きょうへーばっかで不公平だよー（膨れ顔）」

恭平「具体的に言えば次々回からだそうだが、これ以上はネタばれになるから、マジ勘弁してくれ」

こなた「むー……」

銀八「グダグダになる予感がするから強制終了な」

第参訓「別の世界の人から見たら自分だって十分おかしい」（後書き）

木の精だ「フウ、今回も無事終了っ」と

恭平「バトル開始ってトコで終了したな、次回はバトルがメインか」

こなた「恭平、見せ場だよ」頑張ってね」

木の精だ「あの面子なら何もなくても安全だと思うけどな、それでは続きは次回で！」

恭平「こんな駄文に付き合っただき誠に感謝だ！」

こなた「これからも宜しくね！」

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（上）」

木の精だ「なんか久しぶりに見た気がする？そいつはきっと、木の精じゃねえな……（ため息）」

恭平「テンション低っ！今までとはあからさまに逆タイプの乗り出しだな大将！？」

木の精だ「……なんかすっげえ仕事に追われてしんどすぎる……」

こなた「それでこんなに更新遅かったんだ……分からないでもないけどさ、少しは応援してくれてる人もいるんだし、もうちょい頑張ってみなよ！」

木の精だ「精進はするようにしてみるよ……んじゃこなたあれ頼む」

恭平「？今回大将たちは？」

木の精だ「今回は一つの話を三本立て仕様なんだよ、銀時たちは次の前書きで出す」

こなた「なるほどね、ンじゃ行ってみようか。さあ、始まるぞますよ？」

恭平「いくでがんす」

木の精だ「ふんがー」

第肆訓く上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている(上)く

SIDE アルフ

正直、間に合わないと思ってた、目の前にも私達を狙っている獣みたいなバケモンがいるから迂闊に動けないからね。だから恭平が狙われたときは焦ったよ。魔力も何も感じない、本人が言うとおりの唯の男の子じゃ、手に負えない相手だと思ったから。

——でも、違ってたんだ。

恭平「消えてくれるのかねえっ！！！」

私には背中を向けられていたから表情なんてわかんなかったけど、アイツがすごく楽しそうな雄叫びをあげて、恭平に喰らいつこうとしていた獣を模した黒い化身は、横殴りにされ地面に叩き落されていた。まさに一瞬の事だったよ。だけどそれで終わらなかった、続けざまにまた別の狼もどきが飛び掛って

恭平「ちょいさあっ！！！」

狼もどき「■■■■■■■■■■！！！！？」

空いているもう片方の片手拳をそいつに打ち上げる恭平、その拳は獣の腹に深々と突き刺さって、訳の分からないわめき声を上げる獣は少しの間持ち上げられた状態で、前後の足をじたばた動かして身悶えしたかと思ったら

フエイト「消えた…っ！？」

そう、消えたんだ。隣にいたフェイトも恭平たちが心配だったから私と同じように様子を見ていたみたいだね、狼もどきの顛末を見て驚いたように声を上げていた。繰り返すけど狼もどきは消えた、力尽きたかのように、正しく言えばその体が霧散していったって言った方が良さだろうけどね。——つと！

アルフ「こっちにはこっちにお仕事があるってね……！」

フェイト「来るよアルフ！」

視線を外していた事隙が出たとしても誤解したのか、私とフエイトに
対峙している獣達が一斉に動いた、先ず最初に私に向かつて跳んで
きた虎もどきの牙をひねってやり過ぐす、その直後に空を思い切り
噛んだその顎に膝蹴りかまして脳天には肘鉄を叩き込む、恭平のと
きと同じように形が崩れ始めたそれにはもう見向きもせずにつけて
向かつてくるのは狼もどき、今度はこつちから間合いを一気に詰め
て顔を真正面から蹴り飛ばした。勢いよく電柱に激突したそれは
力なく地面に落ちて横たわったまま動かなくなつた。

まだまだ道の先にこの化け物たちがいるのが分かる。こんどは二匹同時に、しかもご丁寧に並んで真横から飛び込んでくる狼コンビたちには

「アルファ……はっ！」

狼もどきA「
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ツ
！！！！！！！！」

狼もどきB「
■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
ツ！！！！！！！！！！
「？？？？」

と短く気合を入れた回し蹴りでまとめてなぎ倒しておいた、内一匹はそのまま地面に叩きつけられて霧散していったけどもう一匹は余力があったのか、すぐに体勢立て直してこっちと距離をとった。やつぱりこいつらは普通の生き物じゃない、どっちかって言うとなりに近い存在だね。止めを刺しに突っ込もうとしたけどフェイトからの念話が送られてくる。

フェイト「アルフ、ランサーが行くよ……！」

アルフ「了解っ」

足を止めた私の脇を黄色の魔力の弾幕が通り過ぎて距離をとった獣と、その陰に潜んでいたの別の獣に直撃して爆発した。ん、なるほどね。

アルフ「ありがとねフェイト、少し油断してたよ」

フェイト「どういたしまして……まだ先は長そうだから気を引き締めよう……」

フェイトの言うとおり狼もどきや虎もどきの数は出てきたときから経るどころか寧ろ増えている、十中八九こいつらが出てくる直前に展開された、この辺りを覆っている結界も無関係じゃないんだろう……きっと主人である輩が近くににいるはずだよ……。そいつを燻り出すには

アルフ「先ずはこいつらの掃除が先だねっ！」

私は目の前の狼もどきをぶん殴りながらそう叫んだ。

SIDE アルフ 了

フェイトは他の三人とは異なり空中に浮き、自分より前方で戦っているアルフをフォトンランサーで掩護し相手が消滅を始めたの確認すると、また新しい相手に狙いをつける。

フェイト「バルディッシュ……！」

バルディッシュ「Scythe Form」

主人の言葉の意を汲んで、自らの形態を斧だったそれから黄白い魔力光を帯びた、湾曲した刃を持つ鎌のものへと変化させるバルディッシュ。

フェイト「アーク……セイバー！」

フェイトがその鎌を振り下ろすと放たれる光の刃、ブーメランの如く回転しながら数体いる狼もどきたちへと向かうセイバーを自身も追走する形で滑空するフェイト。ちなみにこの時点で既にバルディッシュの刃は形成し直されている。

狼もどきたち「■■■■！！」

攻撃が来ると分かっているほど馬鹿ではないらしい、黒い異形たちは四方八方それぞれへと飛びのいて回避行動をとる、が、それはフェイトの予想の範疇で彼女の狙いは此処から先にある。

フェイト「……………セイバーブラスト！」

突如光の刃が爆散し、その爆発自体にまきこまれ、もしくは衝撃波に吹き飛ばされる狼もどきたち、それでも前者はともかく後者は必殺とは行かなかったようで、うち一匹が地面にぶつかり一度跳ねるもすぐさま体勢を立て直して着地する。

——そしてその眼前に迫っているのは光の鎌を振りかぶっている金髪の少女。

その狼もどきの視界に黄光が瞬いた。

フェイト「次っ！」

続けざまに離れた場所でこちらの出方を伺っている様子の狼もどきたちに睨みをやるフェイト、意を決したかのように二匹の異形が左右に駆け出し、同時に自分に飛び掛ってくる。右か、それとも左かどちらを先に倒そうかと一瞬躊躇するフェイト。そこへ

銀時「オメーは左だフェイト!!」

後ろから聞こえた言葉に弾かれた様に、指示された通り左の狼もどきを切り伏せたフェイトは少し意外そうに言葉をくれた相手、もう片方の狼もどきを手にした木刀で切り裂いていた銀時を見る。自分達とは正反対の敵を相手していたはずの彼が何故こっちに向かってきたのかと、実際助かったのだから文句は無いのだが。

フェイト「……………銀時？なんでこっちに…………？」

銀時「いやな？なんか向こうの方じゃ俺の出番とか出ずに終わっちゃいそうだから、とりあえずあいつに任せてこっちに来て見た。銀さんも活躍してーんだよ折角のバトル話なんだし」

フェイト「？」

何処と無く渴いたような、やりきれないような笑みを浮かべて親指で自分がいた場所を指す銀時、彼のいつている意味が分からずに頭に疑問符を浮かべながらそちらに顔を向けるフェイト。そこには

恭平「泣けっ！！！！！」

先ず一匹の狼もどきの顔面を拳で叩き潰し

恭平「喚けえ！！！！！」

間髪いれずに控えていた虎もどきの頭上に一躍で間合いを詰め、その頭蓋を踏み砕き

恭平「そしてえっ！！！！！」

背後に迫る数匹の獣達にはまさに凶悪的な笑みを浮かべながら、片足を軸に体をグルンと一回転させ遠心力を十分につけた

恭平「逝っちまいなあっ！！！！！！！」

回し蹴りで纏めて蹴り飛ばしている恭平の姿があった。

恭平「ふははははは！！見ろ！異形がごみのようだ！！！」

心底楽しんでおられる様子です。

こうなつてくると逆に呆然となるのは味方のほうである、銀時に教えてもらったフェイトは勿論、途中で恭平の殺戮に気がついたアル

フまでぽかんと口を開けていた。

フェイト「……………え、えっとさ銀時、恭平って……………味方……………なんだよね？」

アルフ「なんかすつごい、敵っていう感じがするんだけど。あの笑顔はよしんば大目に見るとして台詞とかが特にさ」

銀時「なんか所謂アレだろ？なんか普段はおとなしいけど戦いになると好戦的になるとか言うあれだ」

多分二重人格の事を言いたいんだろう、二人とは違い胡乱な半目のため息をつきながら銀時は真横から突っ込んでくる狼もどきを蹴り飛ばす、相変わらず霧散していったのを確認すると盛大にため息をついた。

銀時「まったく埒があかねえな、さっきから一体何匹できてんだ。怪物バーゲンセール実地中ですかコノヤロー」

事実正直きりが無かった、一匹潰せば二匹増えてその二匹を相手している間にもまた一匹増えて来るような勘定だ。戦闘力的には大したことのない連中だがこうも数で押されて来たら鬱陶しい事この上なく、大本を叩く必要があるのだが、そいつもなかなか姿を見せない。

アルフ「このままじり貧だねえ……………せめて終りが見えたら大分気も楽なんだけど」

フェイト「まだ、頑張る必要があるみたいだよ……………」

銀時「あーもう、らしくも無く働きモンだな今日の俺は！誰か残業代払え！！」

自分達の目の前で未だに増殖を続けている異形たちを見て、アルフは若干表情に焦りを見せ、フェイトも顔しかめて銀時はうんざりしたように叫んだ。

SIDE 恭平

兎に角不思議な感覚だったな、上手く言葉には出来ないけど。一番近い言葉なら”何となく”だあいまいだっと思われるかも進ねーけど俺は今何となくで戦えている。何となくだがはつきり分かるんだ、この黒い化け物たちの動きが、面白いほどに自然と体が反応してくれるし反撃も出せる。未だ気持ち悪いあの感じは拭えてないけど、それとは別としてテンションは上がるもんだ。鼓動が高鳴っていくのが良く分かる。だからつい叫んじまうのさあ。

恭平「泣けっ！！！！喚けえ！！！！そしてえっ！！！！逝っちまいなあっ！！！！！！！！」

この一言の合間に既に三匹の狼もどき共を屠った、ついでなんでネタも叫んでおこう。

恭平「ふははははは！！見ろ！異形がごみのようだ！！」

ム●力大佐、美味しいです。今度”焼き払え！！”もやってみようか……協力者が思いあたんねーな、アルフでも流石に口から破壊光線は打てないだろうし。

でもって銀の大將は俺の傍から離れてフェイトたちのほうに向かっていたのがさつき見えた、多分こっちは俺に任せてくれたんだろう。

まあ俺としてはそっちの方が都合が良い、大將が邪魔とかじゃなくてあの人やフェイトたちを守るのが俺の役目だからね、その為に与えられたチートの力……

恭平「まだまだ初心者だけど結構必死で頑張ってみるさ！」

????? 「頼もしい事だな、
特異点^{イレギュラー}」

第肆訓　上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（上）

木の精だ「銀八先生も最後で返答します」

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（中）」

木の精だ「続けて中篇！」

銀時「いよいよ、あの黒い女が本格的に絡んでくるわけか」

新八「そんなことよか駄作者！！そろそろ僕達の登場を本格的に考えて！！何のために銀魂を組み込んだの！！万屋無くして銀魂無しだよ！！」

神楽「こなたやなのはですら今回登場できるって前々回発表されたのに私達にはそれすらないなんて最悪もいいところね！！」

木の精だ「いや、お前らもちゃんと登場させるぞ、心配しなくてもしっかり陽の光当ててやるから。その辺は俺も作者として仕事するって」

神楽「むう……」

新八「今の言葉忘れないくださいよ、こちとら出る床出てもいいんですからね」

銀時「んじゃリリカル銀　すた　はじめっぞ」

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（中）」

ああ、背筋が凍ったね。まさに頭から冷水ぶっ掛けられたような気分だよ、テンションがハイになっていたから効果は倍率ドンさらに倍だ。大げさに物言ってるわけじゃねえぞ？

全くの気配なんてモンを感じなかったんだよ、おまけに声が底冷えするほどに冷たいモンだったからな、此処まで来ると落ち着けたって言えるぐらいだ。

……背中に冷たいもんが伝うのを感じながら俺はゆっくりと振り返る。

「?????」……挨拶ぐらいしてやろうか？」

恭平「……いんや、結構だ……」

聞いた声だとは思っていたけど、もしかしたらと思ったけど、出来る事なら外れて欲しかったなあ……こいつを正面から見ても、予想通りな相手に俺は盛大なため息を吐いた。

俺よか少しだけ低めの背丈に漆黒の甲冑を纏い、漆黒の両刃の剣を持った金髪の少女がどっかで見た事がある（具体的に言えばゲームとかで）、バイザーみたいな、フェイスマスクみたいな仮面をつけている。

ついでに言うとも一目見ただけで分かった、分かっちゃった。俺が感じていた嫌な感じはこいつのせいだって。

フェイト「恭平っ!？」

アルフ「コイツッ!何時の間に……!」

フエイトたちもこいつの存在にすぐ気がついて俺とはさむ形で、突如現れた黒少女に少し戸惑いながらも睨みを利かせる、因みに銀の大將は二人の分まで獣退治中だ。

恭平「一応聞かせてもらえるかい？このわけの分からん化け物はお前さんの仕業で、お前さんの目的は何か？後姿を現した理由もあわせて答えてくれたらうれしいねえ」

黒少女「答える義理は無い……のだが、良いだろう。最初の質問は肯定しよう、次の質問は貴様の力を試してみたかった……といった所か。最後の質問は眷属共では少々相手に不足だったようだな。我が主からの命を遂げるために私も動いた……以上だ」

後ろの二人には気にも止めずに俺だけを視界に止めている黒い甲冑少女……まさか律儀に全部答えてくれるとはねえ、なんか考えあるんか唯の気まぐれか。いずれにしてもウソって訳じゃなさそうだな。全く折角良い気分で雑魚掃討出来てたつてのに、こなたとかがいたら間違はなく「俺TUEEEEEEEEE!!!!!!」とか言ってただろうにな。

「空気読まずに同じ海鳴市の離れたどっか」

こなた「俺TUEEEEEEEEE!!!!!!……ハックション!!」

?????「こなちゃん、風邪？」

こなた「いやいや緊張感でなくて悪いね」 多分誰かがうわさしてるんだと思うよなのはちゃん」

オコジョ？「二人とも！今はそんな暢気な事言ってる場合じゃないよ！」

「再び恭平たちの場所」

恭平「つてことは……とりあえず今回の標的は俺？」
ターゲット

黒少女「そうだ」

確認の為の質問は変わる事の無い淡々とした口調で返された。無機質な、表情が伺えないから余計に生気を感じない声だ。

どうも淒く厄介な……いやいや飛び切り恐ろしい奴に目え付けられたもんだな俺も。さつきから何とか平静装っていちやいるけど心臓がばくばく高鳴って破裂しそうな勢いだ、勿論最悪な意味で。

黒少女「故に、少し私と付き合ってもらおう……」

そう手にしていた剣の切っ先を俺に向ける、フェイトたちはそれを見て飛び掛らんばかりに腰を沈めた……けど此処でこいつ等を戦わせるわけにはいかないんだよなあ。

——なんかあつてからじゃ、遅いんだ。

恭平「多分美人さんからのお誘いなら、断るのは野暮ってもんだよな」

フェイト「ッ!？」

アルフ「正気かいアンタっ!?!こいつはねえっ!！」

軽く肩を竦めて場にそぐわない軽い口調の、俺の言葉にフェイトた

ちが信じられないという顔をして俺を見てきたが、俺はそれを片手で制した。

こいつが死ぬほどヤバイって事ぐらいは一目見て分かるんだよ、ついでにこいつの正体も大体察しがついてる。んでその事諸々をフェイトたちに説明するのはアウトと来てるんだから……此処はちよいと強引に引き離すかね。

恭平「ま、大丈夫だつて。何とか死なないように頑張るからよ。そっちも一人戦力が減るから気張ってくれ」

安心する筈は無いと分かっている、なるべく元氣付けるように笑ってやる。だけど二人は案の定不安の表情をしている、銀大將は……！あの人は変わらず一人で獣の退治をしてたけど今一瞬こつちと目が合った。こなたと違ってアイコンタクトできる仲じゃないけどフェイト達とは違うあの瞳の意味は、不思議とこつちが安心するような……詰まる所”激励”か？「頑張つて来い」なんて事をいわれた気がした。

黒少女「……往くぞ」

そうこうしているうちに黒少女の体が浮き上がる……こいつに飛行能力なんてあったけ？兎に角彼女は今重力に逆らって上昇を続け、ある程度地面と差がついたところで静止した。意図は何なのか不明だけど待っているんだろう。どうせだったらそのままどっか行って欲しかったんだけどな。

恭平「仕方無えんだよな……こうしねえと」

誰にも聞こえないように小さく呟くと自分の体が浮くを頭の中で

イメージする、こんな事まで自然と分かるもんだから驚きだ、これ
もまた女神様からの加護って言う事になるんだろ。程無くして
想像が現実イメージリアルのものとなり、足が地面からゆっくりと離れて行く。ア
ルフが何か叫んでいたように聞こえたが狼もどきたちの喚きもあつ
て良く聞こえなかった。やがて黒の騎士王的少女と視線があう高さ
にまで達する俺。

俺と目の前の敵は言葉を発することなく対峙する。まだ、だ。

まだこの女は仕掛けてくる気はないのが判る、はつきりとした敵意
はバンバンぶつけられてくるが攻撃しようとする気迫が無え。何を
企んでいるのやらな。

黒少女「……………」

そんな風に俺が模索していると黒少女が無言で静かに剣の切っ先を
俺…………じゃ無くて俺の背後の、離れた場所に佇んでいる廃れた高層
ビルに向けた。

…………中々どうして御詠え向きじゃねえの。あの獣達を相手にして
いたのと同じように知らず知らずのうちに口端が若干釣りあがるの
が分かる。あわてて手で押さえて消すけどな、違う違う、俺は戦闘
狂なんかじゃない。

黒少女「…………先に行かせてもらっぞ」

俺の表情を見て少しだけ彼女の口元にも笑みを浮かべ俺の脇を通り
過ぎて目的地へ向かう、笑う事なんて忘れちゃった鉄面皮の上に、
仮面付けただけの奴かと思ってたけど随分嬉しそうだったな、あの
イカレポンチがっ！

恭平「………」

舌打ち一つすると俺は黒少女の後を追う形で廃ビルへと向かった。

「銀時たちから少し離れた廃ビル内」

取りあえず先行している黒騎士に習って派手に崩壊している窓から中に入る、もう放棄されて長い事経つんだろう、内部は未だに頑強に此処を支えている石柱以外は無残なものだった、荒れ放題だ。そして入ってきた俺と対峙する位置で佇んでいる漆黒の騎士……王。コンクリートに突き刺している、俺の考えている通り、設定通りなら闇に堕ちた聖剣引き抜いて、こっちに向ける。

恭平「闘り合う前に、二つだけ質問良いかいお姉さん？」

黒騎士「なんだ」

とりあえず一番確認したい事を聞いとかないな。

恭平「あんた、一時は希望を掲げて自分を慕ってくれる奴らのために戦って……ぶっちゃけ騎士王って呼ばれたことあるかい？」

黒騎士「…ある、今となつては忘却の彼方に消え入りそうなおぼろげだな」

恭平「……次の質問、あんたは俺とおなじで呼ばれた口か？」

黒騎士「いいや、違う」

この言葉で俺は純粹に笑顔が出来た、ああすっきりした、やっぱりか。

恭平「ありがとうな、やっと疑問が晴れたよ。いやいや、どっかで見たことがあるな」って思ってたんだよね！半信半疑で」

ああ、これで確信を持てた。やっぱりだよ、やっぱりだ！俺はこいつ知らない！こいつを見たことも増してや聞いたことも無い！最初見たときから感じてた別のモヤモヤ感がなくなつて少しスツとしたよ。

黒騎士「……それで、もういいのか？」

恭平「ああ、質問おしまいだよ。こつからは俺としては珍しく真剣モードだ……若干のふざけありでな！」

黒騎士「出来れば全くのふざけなしで頼みたいものだ……」

恭平「俺にそれを望むのは酷つてモンなんだよ、覚えときな。この訳のわかんねえイカレポンチがあ……！」

語尾だけ普段の三割り増し低い声音で言つてやるのと同時に俺達は互い目掛けて地面を強く蹴つて突っ込んだ。

悪いなこなた……らしくもなく切羽詰つた現状だ……。後でどん

だけ怒ってもいいから、”約束”だけは絶対やぶらねえから、安心しとけ。

SIDE 恭平 了

唐突の事で反応が遅れた、一体何時からそこにいたのか。それまでは特別問題などとは無かったのにその存在が現れてから彼女、アルフの心境は一転した。目の前の一見すればなんて事のない黒い鎧を纏った少女、銀時辺りが見れば自分達の時と同じようにコスプレだ何だと呆れるのだろうか。（尤もその彼は今自分たちの分まで化け物の相手をしてくれている）

兎に角此方に見向きもしないこの少女が途轍も無く危険である事が良く分かる、魔力を持っていない恭平や銀時は分からなくて当たり前だが、自分と同じく相手を油断無く睨み付けている主人には分かる。有している魔力が尋常ではないのだ。自分やフェイトのそれを軽く超えている。

故に全員総がかりで挑むのが当たり前、然るべき対処だと思っていたのに何を思っていたのか黒髪の少年が、唯一人で相手をすると言い出した慌てて止めようとしたが聞いてくれそうに無く、黒い甲冑姿の少女もまた自分達には興味が無いのか殺気を向けているにもかかわらず視線を向ける事すらない。

結局二人の少女と少年は此方の思惑とははずれ何処かに飛び立ってしまった。皮肉にも同時にその場を支配していた威圧感も無くなる。

アルフ「ああ、もう！何だってあんな無茶なことしてくれるんだろうねえっあの子は！」

苛立ちを隠せずに悪態つきながら向かってくる狼もどきを殴り飛ばすアルフ、そんな彼女に背後に迫る新しい異形の姿が二つ、翼らしいものがあり上空から迫ってきたから鳥をイメージしているのだろうか？最早こうなつては容姿などどうでもいいが。

鳥もどき「■■■■■！！」

その高速で襲い掛かる鳥もどき達の勢いを止めるフェイトと銀時、それぞれの獲物を使ってその嘴をを、鋭利にとがった爪を防ぎ

銀時「おりゃ！」

フェイト「ふっ…！」

そのまま気合を込めて一気に切り裂いた。鳥もどきたち霧散したのを確認すると、アルフに背中を合わせ油断無く化け物たちを見据えながら大きく銀時が息を吐く、よく見れば額は汗ばんでおりぼちぼち疲れてきているのが分かった。

フェイト「銀時……大丈夫？」

フェイト「ああ？ガキに心配されるような銀さんじゃねえよ、そっちこそ氣い抜くんじゃねえぞおい」

銀時と同じ方面を向きバルディッシュを構えているフェイトが不安げにたずねるが当の銀時はいつものように氣だるげに答えて、くしやくしやとフェイトの頭を撫で少し安心したかのように僅かに微笑んでうなずくフェイト、普段ならば微笑ましい光景なのだが、今はそれどころではない状況である。

アルフ「二人とも、和むのはまた後においておくれよ！なんかまたあいつら一芸見せてくれるらしいからさ！」

アルフにの呆れたような言葉にはつととなった二人は異形たちに再び視線を向ける、底には、生まれて出てきていた異形たちが今度は戻り始めていた。形を成す前の、あの黒い円を描いた影のようなものへと。

フェイトたちが警戒する中それらは銀時たちの足下を過ぎて一箇所集まり初める、差し詰めキ。グスラ・ムに合体するスラ・ムだ。埒が明かないと思っていたのはお互い様で、痺れを切らした向こうが勝負にでた……と思っていいいのだろう。

銀時「ほんと……芸達者な事で」

半目で呟いた銀時の視線の先にあったのは形成されたのは巨躯の蛇もとい竜だった。デザインは相変わらずの全身黒一色と姿以外は差してこれまで相手していたものと変化はない化け物だった。なんでもありである。

アルフ「あからさまに、恭平の後を追わせないつもりだね」

銀時「んでもって、こいつ倒したら終りとか、そういう話なんじゃね？」

黒い竜を見据えながらため息をついて木刀を構え直す銀時、その表情には若干ながら苛立っているようにも見える。

銀時「（まったくメンドクセーなおい、次から次へとワケわかんねー化け物が出てきてよ）邪魔ばっかしてくんじゃねえって！」

銀時「ぐっ!!」

それを間一髪のところまで受けとめる銀時だがその勢いに負けて体が沈む、威力の重さが今までのものとは段違いってレベルじゃない、それどころか桁違いなのだ。苦悶の表情で踏ん張っている銀時だが何時力負けするか分からない状況だ、そこへ黒い竜に橙色の獣の人が襲い掛かる。

アルフ「銀時離しなよっ、このバケモンっ!!」

叫びながら勢いよく滑空してきたアルフの体重を乗せた渾身の蹴りが黒竜のわき腹に叩き込まれる、その一撃で黒い竜もぐもぐたうめき声を上げて若干巨体が揺れた、一瞬ではあったが力の抜けた隙にを身体をバネにして、地面を強くけり鏢迫り合いから脱出する銀時。

黒竜「■■■■■■■■■■!!!!」

対して黒竜は逃がした銀時^{エモ}よりも余計な事をしてくれたアルフ^{ジャマモ}を潰す事にしたようで、体を捻り勢いよくその太く頑強な尻尾を追撃をかけようとしてくるアルフ目掛けて振り回す。

アルフ「っ!食らっただけじゃ済まされないね!」

すんでのところで回避に成功するアルフだがよけた際に感じた強い風圧で身体に戦慄が走る、思わず冷や汗が出る彼女に更なる追撃が迫る。雄たけびを上げながらの竜の爪と牙の猛襲を必死で避けつつけるアルフ。しかし

アルフ「なっ!?!」

一瞬動きが不自然に止まる、唐突に攻撃のタイミングをずらされた、フェイントだ。対応が間に合わず、釣られてしまったアルフに本命の攻撃が迫る。

S I D E アルフ

なぜか自分の鼓動の音だけが酷く良く聞こえた、その癖他の音は全く聞こえないのはどういう理屈なんだろう、景色自体は全く変わっていないのに迫ってくるあの黒い竜の爪も随分ゆつくりだ……あれ？そっぴやこっぴやのってなんかであるって聞いた気がするね？何だっけ？

ん？フェイトが、あたしのご主人が何か叫んでる？よく聞こえないよ？

S I D E アルフ了

フェイト「——ッ……………！！！！アルフウウウ！！！！」

響き渡る聞いた事の無いフェイトの大絶叫、彼女の体勢が不安定なために防御を構える事も出来ず回避も間に合わない。

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（中）」

銀時「話の斬り方おかしくない？」

木の精だ「……………何をどうすりゃいいか良くわかんなかった、今は後悔してる」

第肆訓く上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（後）く

木の精だ「……………」

なのは「ねえ作者さん……幾らなんでもアレはないと思うの」

木の精だ「……………」

なのは「確かに出番は欲しいって言ったよ？でもね……………あんな形で、まさについでみたいな感じで……………出されなくなかったの」

木の精だ「……………」

なのは「……………なにか、言いたい事あるかな？」

木の精だ「……………死にたくn」

なのは「リリカル銀 すた、始まります」

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（後）」

だから

故に

そのため

割っではいる銀の侍。

銀時「世の中そう上手くいかねえんだよ……！テストに出すから覚えとけえええ……！」

本日一番の凄まじい轟音と響かせ、アルフを狙っていた竜の爪を銀時の木刀が防いでいた、そのまま反動でアルフと一緒に大きく距離をとって着地する銀時。そばへすぐにフェイトも合流する。

フェイト「アルフ、大丈夫！？怪我はしてないっ！？」

アルフ「大丈夫だよフェイト、流石に今のは危なかったけどね。ありがと銀時、今のは冗談抜きでやばかった」

凄く心配げな表情でアルフの安否を確認するフェイトにアルフは苦笑気味に答えるが、銀時には真剣な瞳で礼を言う。 ” 後になった今 ” だから分かるのだ、この男がいなければ自分は恐らく取り返しのつかない事になっていたのだと。

銀時「ンじゃ今度なんか甘いもんでも奢ってくれや、それでトントンにしてあげようじゃないの」

そして当の本人はこんな軽い感じで済ませようとしている、二人にはそれが凄く心強く感じた。

アルフ「OK！いいところ探しといてあげるよ！そのためにあいつには早いトコご退場してもらおうかねえ！」

フェイト「その事なんだけど、私に考えがあるんだ。二人とも聞いてくれる？」

アルフは勝気に笑っていきまき、フェイトが勝算があるのか自身の意見を提案する、それをアルフと銀時は自信ありげにうなずいた。

銀時「おっしや、銀さんに任しやがれ！ばっちりやってやるっじやないの！！」

アルフ「さっきの仕返しだね、思いつきりやっちゃんなよフェイト！」

言い終わるのと皮切りに駆け出す二人、フェイトが銀時たちに話した内容は二人には時間を稼いで欲しい、自分は今から第魔法の準備にかかる、それには少し時間がかかる　という事だった。

銀時「覚悟しろや、このトカゲ面があっ！」

そう叫んで伸ばされた来た爪の一撃を紙一重でかわす銀時、一気に黒竜の懷まで飛び込むと

銀時「ぜりやあああ！！」

勢い乗せて相手の首を木刀でぶったいた、多少は効いたのか苦悶と思えるようなうめきを上げて二、三步たたらを踏む黒竜。追撃は行わずにすぐさま其処から飛びのく銀時、代わりにアルフが上空から頭上に拳を叩き込む、彼女もまた一撃入れた直後反撃が来る前に離脱する。

アルフも銀時も勝負を決めるような力を込めたものは使わない、あくまで足を止める必要の無い小技ばかりだ、今自分達がすることは倒す事ではないのだから。

フェイト「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神よ……」

二人がヒット&アウェイの戦いを繰り返している隙に、フ

エイトは言の葉を依り代にして魔力を練り上げる、展開される魔力陣と周囲に形成され始めるフォトンスフィア。

一方で攻撃、離脱、もしくは回避に専念する銀時とアルフだがその表情は明らかに疲労が表れ始めていた、二人がかりとはいえその巨体に見合ったタフネスと体力が向こうにはある、おまけに此方の攻撃は基本的に牽制程度の攻撃を連発して自分達に気を引かせる事にある、当然手数や立ち回りも大きいものになってしまう。

銀時「ッ……やっぱしんどいわコレ」

アルフ「泣き言無しだよ、銀時！少し我慢すりゃ良いんだからもうちょいガンバロ！」

一度間合いを取って額の汗をぬぐう銀時のぼやきに、少し離れた上空からアルフが発破を飛ばした、しかしかく言う彼女もところどころ怪我をしている。そんなアルフの若干カラ元氣交えた激励に、不敵な笑みで“あいよ”とだけ短く答える銀時。氣を引き締めてまだまだまだお盛んな（体力的な意味で）様子の黒い化け物へ突撃しようと身を構えた瞬間。

ズウ……………ンン……………

そう遠くない場所で何か崩れ落ちるような低い音が聞こえてきた。

アルフ「……多分恭平の方だよ、何があつたにせよあんまりゆつたりはしてられないね」

銀時に代わって視野の効くアルフが辺りを見回すと、離れた場所の廃れたビルの一角が派手に埃を巻き上げて崩れていた、方向的に恭平とあの黒い女が向かっていったものと重なる。ふと唐突にアルフ

の胸に嫌な感覚が、言うなら激しい胸騒ぎがした。

銀時「兎に角、今は目の前の事に集中しとけアルフ、恭平のことは
あのバカ
こっちが終わってから探しにいきやいい」

アルフ「……………だね」

銀時の言葉にアルフは静かにうなずくと今度こそ銀時は突っ込んだ、アルフもその横に滑空しながら並ぶ、迎え撃つ黒い竜はその頑強そうな爪で銀時……………ではなくアスファルトの地面をえぐった。単発の自分では割に合わないと考えたのだろうか、多くの石つぶてが勢い良く飛ばされる。

銀時「中途半端に知恵まわしてんじゃねえぞおお!!」

アルフ「トカゲの癖に生意気だよ!!」

迫る多数の石の弾幕に対して二人は悪態つき、アルフが銀時を抱えて高く上空へと避難した、それを見上げた黒竜がすかさず先端尖った尻尾を勢いよく振るう、しかしアルフの表情には余裕の笑みが浮かんでいる。

アルフ「嘗めないで欲しいね!!そんな反撃読めてるよ!!」

予想通りの展開なためその尾には掠りもせずに掻い潜ったアルフは、正面から一直線に高度を落とし

アルフ「空爆・ザ・銀時!!!!」

一斉にスフィアから夥しい程の光弾が撃ち出される、目掛けて行く先の黒竜は腕を振るい、尾で薙ぎ、懸命に魔力弾を破壊するものの如何せん限度はある。

1000と64個の魔力弾では比べるべくも無く、結局先頭にあった数十発を壊したところで光弾の波にのみこまれた。

[illegible]

絶叫を上げながら黒竜の体が大きく仰け反る、それまでにはなかった巨躯の化け物の絶対的致命的な隙が出来た、そしてその間尚も途切れることなくフェイトの攻撃は一つに集中して襲い掛かる、その

ファランクス

様まさしく突撃陣形。

アルフ「銀時！このまま一気に行くよ！！」

銀時「おうよッ！」

この優勢に乗じてアルフと銀時も地面を駆ける、特にアルフはこのチャンスに逃したくないという思いが強かった。

アルフ「（ランチヤーのフアランクスシフト……！フェイトの魔法の中でも大火力を誇るけどその分魔力の消費が大きい！……此処で倒しきれないと少なくともフェイトは厳しいよ……！）だからっ……！」

ランチャーの集中攻撃が止み、爆煙で視界がかなり悪いのにも気にせず地面を強く蹴って飛び込んだ、速度と魔力を込めた拳を

アルフ「アンタはもうこれで終わりなあつ!!」

漆黒の太い首に打ち込んだ。

アルフ「銀時っ!!」

銀時「締めはやっぱ主人公ってええええ!!」

直後にアルフの肩を銀時が強く蹴り踏んで更に上空へと舞い上がる、
一瞬黒の竜と視線が上下に交差するとその頭上を越えて、木刀を大
上段に構え

銀時「相場が決まってるんだよおおおお!!!!」

銀時が全力で振り下ろすのと

フェイト「……ッ!？」

何かに感づいてフェイトが息を呑むのは殆ど同時だった。

アルフ「……は？」

銀時「………なっ!？」

一瞬遅れて残りの二人も驚愕する、結論から言うと銀時の木刀は切ることは切ったのだ。空をであるが、では黒の竜自体はどうなったかというところ……それこそ”消えた”、狼もどきや虎もどきの様な下手な比喻ではなく、言葉道理の意味で。瞬きする間も無くそこにいたものが忽然と姿をなくした。

銀時「……………おいおい、幾らなんでもこの展開は無いんじゃない？」
着地した銀時が嘆息して辺りを見回すが、やはり今の今まで相手を
していた竜の化生の姿は無く、それどころか戦闘の経過で破壊され
た筈の塀やアスファルトの地面、電柱などが元に直っていた。

アルフ《張られていた結界も解かれてるね……………》

フェイト《それもついさつき……………、銀時が止めを刺そうとした瞬間
だったよ》

一応警戒を解いたのか、BJを解除したフェイトからの念話を聞いて
アルフは少し考える、結界が消えた理由を。先ず話を辿るとあの
結界は恭平と一緒にどこかに行ったあの黒い騎士が張った物のよう
で、ついであの黒い連中も同じく騎士の仕業らしい。
では何故消えたのか？確証こそないが妙な確信が彼女にあった、答
えは必要がなくなったから。

そしてあの黒騎士の目的は――

――先ほど彼女の胸中巡った嫌な予感が再び訪れた。

アルフ「……………私は恭平拾ってから帰ることにするよ、フェイトは
銀時連れて先に行っててくれない？」

フェイト「え……………でも……………」

努めて明るい表情と声で言ってみたが彼女の主は少し戸惑う、”ど
うせなら皆で迎えに行った方が”というのがフェイトの考えだ。

アルフ「無理じゃなくていいって、フランクスシフトでかなりへばってるんだろ？あいつの事は私に任せて、フェイトはゆっくり休みなよ。銀時、フェイトの事頼んだよ」

それでも穏やかに微笑みながら、優しくフェイトの頭をなでると、視線を銀時に向けて同じく信頼を込めた笑みを作る。

対して銀時は面倒くさそうに頭を掻くと”あいよ”とだけ答えて、背中を向けてしゃがみこんだ。つまりはおんぶをする態勢だ。

フェイト「……？」

銀時「ホレさつさと乗れよ、バテてんだろ？ナビさえしてくれりゃ家まで運んでやるからよ」

そう銀時が促す、フェイトは流石に少し恥ずかしく思い最初は、少し躊躇したが事実かなり消耗していたのでここは厚意に甘える事にした。

銀時「……んじゃフェイトに案内してもらいながら、先にお前らの家とやらに行つとくからな」

アルフ「ん、そいじゃまた後でね」

フェイト「銀時……先ずはこの道をまっすぐです」

銀時はフェイトの指示に従って薄暗い道を歩き出し、アルフはその二人の姿が見えなくなるまで見送った。

SIDE アルフ

銀時たちの姿が見えなくなると、私は全速力で駆け出していた。出来る事なら空を飛んで行きたかったんだけどもし万一に一般人に目撃されるとまた面倒だからね。目指している場所はいわずもがなさつき爆発(?)があつた廃ビル。

意識を集中して探ってみてもあの黒い騎士の魔力はそこからはもう感じ取れない、それは当然もうこの世界から出て行つたつてことになる。じゃあ一緒にいたはずのあいつは？恭平はどうなつたんだ？別に特別仲が良くなつたわけでも、増して付き合いが長いわけじゃない。それでも私達のために一緒に戦つてくれたあの子が危ない目にあっているなら、それを捨てておくなんて寝覚めが悪すぎる！！

アルフ「……無事でいなよ恭平……！」

人気の無い路地をとにかく突つ走つた、その甲斐あつてか程無くして目的地つて思える廃ビルの前にたどり着けた。うん十中八九此処だ、遠目からだったから外見はわかんないけど、距離的に考えて、他にそれらしい建物はないしね。迷わず私は崩壊した元ガラス張りの入り口から屋内に飛び込んだ。

アルフ「恭平っ！！何処だい！？此処にいるんだろっ！？」

大声で叫んでみるけど、半分予想通りに返答は無い、これくらいじゃ諦めないよ！

アルフ「恭平っ！いるなら返事してくれよ！アルフお姉さんが迎えに来てあげたよ！」

とりあえず声を張り上げて呼びながら建物の中を歩き回る、本当は一気に走り回っていきたかったんだけど下手に急ぎすぎて見落としたら本末転倒だからさ。

一階……空振り

二階……居ない

三階……見つからない

私が足を止めたのは四階へつながらる階段を上り終えた瞬間だった。感じたんだ、恭平の匂い……そしてそれよりも遥かに強い、感じなくなかった嫌に金物を思わせる臭い……血の臭いを。

アルフ「ッ……恭平っ!!」

臭いを辿り私はまた全速力で走り出す、臭いの先は何かに使つか良く分からないけど広間のような大きい部屋だった、ここで一体何があったのか、天井には大きな穴が二つあいており壁も一箇所派手に崩壊して外の景色を覗かせていた。ああ、あの子かい？

——……いたよ、恭平は。

月明かりに照らされて、たぶん自分のそれで作った血溜りで服とズボンをぬらして汚して、砕けた岩盤に背中を預けた形で力なく座り込んでいる恭平が……部屋の隅に居たんだ。

アルフ「~~~~っ！！！恭……平……っ！！！」

何とか声を搾り出して駆け寄って抱き起こす。

アルフ「しっかりしなよ！！死んじやないだろうねっ！？」

先ず脈と呼吸を計ってみる、呼吸はかなり弱いけど脈は合ったから最悪の事態には間に合ったみたいだ、次にとりあえず望み薄だと分かっているても頼を何度か叩いて意識を覚まさせようとするけど、やっぱり効果なし、もうここで出来る事はない、寧ろ不衛生だから悪影響だ。すぐに病院に叩き込みたいけど連絡もなしに持っていていても、向こうの準備が出来てない。その合間に恭平の体力が尽きたら元も子もない。結局私達の家に一度帰るしかないね、せめて応急処置だけでもっ！

アルフ「安心しなよ、こんな傷すぐに直って元気になれるからね！
！諦めるんじゃないよ恭平！！」

聞こえているかどうか関係無しに言いながら私は転移の魔方陣を足元に描く、イメージするのは自分達に家の中の玄関。すぐさまオレンジの光が私達を包み始める、これが完全に瞬間にはよくよく見知った場所だ。”出来る事ならそこでフェイトといきなり鉢合わせはごめんこうむりたいね……。”そんな事を考がえている私と意識のない恭平を光が飲み込んだ。

SIDE アルフ 了

くおまけ

銀八「教えて！」

全員「銀八先生！！」

銀八「いや、今回は随分長くかつちやったね、とりあえずラストを飾る質問コーナー行ってみようか」

恭平「アシスタントは代わらずに俺とこなたでお送りするよ」

こなた「ん？でも恭平、本編で死に掛けてるんじゃないの？」

恭平「あつちとこつちは無関係っていう設定にしといてくれ」

銀時「んじゃ始めっぞ」

こなた「まずは前回に続いてペンネーム黒龍さんからの質問！」

1・こなたに質問。ぶっちゃけ、あなたは百合ですか？

2・恭平がリリカルなのはメンバーに対してフラグ立てたりするんですか？

3・ハーレムで大変な思いするのは銀さんだけですか？

恭平「以上だね、こなたやつぱり来たなこの質問」

こなた「うん、うちの人（作者の事）もらき　すたを組み込むとき
確実にいわれると思ってたらしいよ、これは私がずばりお答えする
けど、答えはNO！原作でかがみたちに絡むのはあくまでも女の子
同士での友情だよ！ある程度の愛もないとは言えないけどやっぱお
相手は男の子でしょ」

恭平「ンじゃ次は俺な、俺が言うのもなんだけど企画書を軽く覗き
込む辺り一応そういう話もあるみたいだ、これ以上はネタばれにな
るんで、相手は本編見て確認してくれ！」

銀八「ハイ、最後はせんせーがお答えします。ハーレムで泣く様な
羨ましい男はこの手で殺したいほどに妬ましいです。以上」

恭平「せんせーそれあんたの感想言っただけだろ。答えになつてな
いって」

銀八「うるせええ！！他人事みたいにいつてっけどな！！お前だっ
てハーレムになる可能性十分あるんだよ！！殺されてえかああ！！」

こなた「……とりあえず今の発言を答えにしといてよ」

恭平「……ん？何今の？フラグ？」

銀八「つーワケで黒龍さん、廊下にたつときなさい」

こなた「続いてペンネームM i n o s a w aさんからの質問だよ」

1 作者が好きならき すたの中で好きなキャラは誰ですか？

2 好きな声優は誰ですか？

3 この小説の世界に入り込んだきっかけを作った作品は何ですか？

こなた「以上だね、んじたちもや先生お願いします」

銀八「ハイずばりお答えします、作者はらき すた原作じゃこなたとみなみが本格的に好きです。理由はやたら長くなるので今回は省きます」

恭平「これは俺が答えよう、好きな中の人は…やつぱ保志 総一郎さんだな、輝けええええ！！とか、ねええけつつううう！！！！とかあの人の声は叫ぶとあつ過ぎる！」

こなた「最後の質問は私が担当するね、勿論赤夜叉先生！っていいたいんだけど此処だけの話、作者ラモン先生が現在進行形で執筆されてる作品、魔法少女リリカルなのはStrikersとある新人の日常ゝがきっかけなんだ。あの作品は本当に素晴らしいよ！お勧めできるね本気で つと後半はうちの人の言葉だよ」

銀八「これで全部だな、そいじゃMinosawaさん、廊下に立つときなさい」

恭平「しかし俺大丈夫なのか？かなりやばい状態で終わったぞあれ」

こなた「一応主人公だから……多分大丈夫とは思っけどね」

銀八「死ぬも生きるも明日になんねえとわかんねえよ。つーわけで
その辺は次回以降までお預けだ」

恭平「だな、ンじゃ今回はこの辺で」

A L L「」「バイニ〜!!!!」「」

第肆訓「上手く行ったり行かなかったりは大概バランスよく出来ている（後）」

木の精だ「…生き残れるとは思わなかった……これで今回の三本たてはお終い！やたら長くなった戦闘回も終了です！…次からは戦闘の話ももう少しコンパクトに出来るように頑張りたいな」

こなた「やたらグダグダしてたよね、もっと力抜いた方がいいんじゃない？」

木の精だ「いやさ、出来るだけ詳しく書こうとしてたらしいの間にこんな感じに…やっぱ文才ねーわ俺」

こなた「でも止める気ないんですよ？」

木の精だ「おう！折角始めたんだから最後までやりたい！皆さんもこんな俺でよかったですら最後までお付き合いください！」

こなた「それじゃ今回はこの辺で」

恭平「感想とか、アドバイス、誤字脱字報告あればお願いします！」

第伍訓く突つ走る少女はいろんな意味でとめられないく（前書き）

木のせいだ「この話も漸く10話目に突入しただと？そいつあきつと……………木の精だあああああああ！！！！」

恭平「お、調子が戻ったみたいだな大将？」

こなた「それより今回から漸く私やこなたちゃんが出演できるようになったんだよね？」

なのは「待ちに待った”初”！出演…………頑張ります！」

恭平「…………（やけに強調したな…………）んじやお約束のあれ、行ってみるか」

こなた・アルフ「さあ、始まるぞますよ？」

フェイト「いくでがんす」（笑顔ですか死ぬほど真っ赤になります）」

恭平・なのは「ふんがー」

木の精だ「って俺は！？」

第伍訓　突つ走る少女はいろんな意味でとめられない

帰宅の途中で正体不明の化け物たちに襲われたフェイト、アルフ、銀時。そして謎の漆黒の甲冑を身に纏った女性と一騎討ちの未敗れ深手の傷を負った恭平、彼の身にどんな過程が起きたのか。

それらを知る前に此处で一度別の物語、もう一人のこの世界の介入者。

泉　こなたのストーリーを紐解こう。時間は恭平がアルフに助け出される頃から数時間ほど遡る事になる。

こなた「どうしてこうなった？どうしてこうなった？………大事な事なんで二回言いました」

既に日が暮れた時刻のこの世界に飛ばされたもう一人の人物、青い長髪とアホ毛がチャームポイント（？／因みに今はこれにオブションとして女神から貰ったグラスンを某兄気風に乗せている）な少女こなたは顎に手を軽く添えて小首を傾げながら呟いた、二回。

彼女が今現在いるのは、ひとけの少ない公園だった、彼女自身からしてみればあの光に包まれて視界が一度白一色になり次に広がった景色がこれである。見慣れない場所になぜか一緒にいた恭平の消失、思わず無意識にため息が出るがすぐにゆるい笑みを作り

こなた「兎に角動かないとね、此处にいたって解決する事は何もなさそうだし」

恭平の事は心配じゃないわけじゃないが、彼も大方この世界に飛ばされているのだろう、探すのは先ず自分に起きている問題を片付けてからだ、とこなたの考えはそこに至って歩き出した。
先ずは公園からだと不意に頭の中に声が響いてきた、なんかついさつきまで聞いていた覚えのあるそれ。

???《……なた………こなた………》

こなた「ん………なにこれ？ひょっとして界●様？」

???「いや、なんで某龍球なんですか……まあともあれ、私の声は聞こえているようですね」

いきなりのボケに呆れた様子で突っ込むその声、しかしどこか安堵したような言葉も交じっている。

こなた「まね、ところで聞きたいことあるんだけどさ。此処ってちゃんとリリなのの世界なんだよね？《女神》様」

女神《ちゃんとしているかどうかは置いておくとして、間違いないそこはリリカル　なのはを基盤にした世界ですよ》

こなた「おk……恭平もこっちの世界に来れてるの？飛ばされる前までは一緒にいたはずなのに、何処にも見当たらないんだけど？」

女神《ええ、それは確かです。彼も貴方同様にこの世界内で存在を感知できますますので。………ただ》

一応安心できるような返答だったが、なぜか最後に不安を煽るよう

な言葉ついてきて、つい表情を曇らせてこなたは”ただ？”と聞き返す。

女神《先ほどから恭平にも語り掛けてはいるのですが全くつながらないのです》

こなた「……寝てるとか、気絶中とかそういうんじゃないの？」

女神「それも考えたのですが……私は女神わたしの能力で意識を失っている相手にイメージを飛ばして語りかける能力があります。しかしそれも適用されませんでした」

こなた「つまり起きてはいるけど、女神様の声は届いてないってわけ？……私達の前に似たようなことってなかったの？」

女神《……過去に前例が幾つか……いずれも先にお話した貴方達と対となる存在の所業によるものです》

この返答にこなたは今まで溜めていた溜息を盛大に吐き出した、何となく大体察しはついていたが。……色々な意味でこの世界に飛ばされた途端に、面倒ごとに巻き込まれてしまった相棒の身を案じてしまう、するとこちらの心中を見透かしたように《女神》が語りかけてきた。

女神《忘れていませんか？今の貴方や恭平は下手な化け物たちよりも数段強いんですよ？よほどの事がない限り、……きっと大丈夫です》

こなた「……ん、そうだったよね。じゃあさ今度は別の質問！私が飛ばされたのって原作じゃ時期的にどれ位？」

完全に安心しきれたわけじゃないが心配ばかりしていても仕方ないので気持ち切り替えて、今度は自分の現状を聞いてみるこなた、とりあえずこれで自分の行動方針を決めようと思っている。

女神《そうですね……これは最初期……無印編の初め辺りです、話で言えば一話の夜の場面ですね。………予想以上に侵食が早い……》

こなた「ふうん……なのはちゃんが魔法少女になった時の頃か……。上手く行けば記念すべき第一話のあのシーンに立ち会えるかもってわけだね！G」だよ女神様！」

あえて最後に聞こえた、何となく不穏な部分の言葉は当たり前のようにスルーするこなた。直感だが今は聞いたところではぐらかされるような気がした。対して《女神》はまたしても呆れた様子のため息を漏らす。「基本そういうことしか考えてないのか」といわんばかりだ。

女神《まあ、そういうわけですね。ちょうど主人公、高町なのはがユーノ・スクライアの呼びかけに応じて、彼の元に駆けつけている頃合ですから、宜しければ其処までご案内しましょう》

こなた「え、ホントに！？言ってみるもんだねこういうのも………そいじゃ案内宜しくだよ」

よもや本当にあの場面に見ることが出来るとは、まして其処に案内までついてくるとは思ってたのにか嬉々して驚くこなた。それを諷めるに《女神》の声が少しばかり強めになる。

女神《唯一つ知っておいてもらいたいのは、繰り返すことになりま

すがこの世界は既に貴女と相反する存在の干渉を受けているという事です、直接危害を加えに来ることは先ず間違いはありません。貴女の知る物語とは大きく異なる場面もあるでしょう。十分に」

こなた「気をつける、でしょ？わかつてるよ」

忠告と取れる言葉を遮るこなたの表情は、兎に角自信にあふれていた。任せておけと言外に伝える笑みだった。

どんな意図があるのか一拍の間をおいて、再び《女神》が口にする。

女神《――では、先ずは今いる位置から左手に向かってください」

こなた「了解！今行くからね、なのはちゃんにユーノ君！」

斯くの如く、青い少女は走り出す。元来今自分がこの世界の中
欧となる明るい茶髪の少女を、未知なる敵対存在から守り通すため
……というのは半分以下の理由でありその大半は”大好きなアニメの主人公と仲良くなりたいたい！しかも初対面で助けてあげれば好印象間違いないし！”という、煩惱丸出しな物が原動力になっている。

女神《……まあ、これぐらいは許容範囲ですね》

どこか諦めたような《女神》の呟きは、果たして彼女に届いていたのだろうか？

?????「……っは……っは……っは……っは……っは！」

真つ暗な夜道をまだ年端も行かない少女はツインテールに纏めた明るい茶髪を揺らし、息を切らしながらも走っていた、目指しているのはこの日の下校中に彼女がとある理由によって立ち寄った動物病

院だ。

もしかしたら単なる幻聴だったかもしれない、しかしそれでもその時少女は何処からともなく助けを求める”声”を聞いた、そして同時に発見したのが怪我を負っていたフェレットだ。

?????「さっきの声、あの時と同じ人の声だった…！」

そしてその日の晩に、件のフェレットの事を気にかけて家族に飼う事を相談したらOKが出て、ホッと一安心して今日はもう休もうかと思っていたところに再び聞こえてきたその”声”、内容は昼間と同じく唯必死に助けて欲しい懇願してくる物だった。端的な上に一方的に終わったその訴えだったが兎角優しい性根の持ち主である少女「高町　なのは」は放っておく事などできず取るもの取り敢えず家を飛び出し、現在に至る。

なのは「……………此处に…あの声の人がいるのかなっ……………!？」

一生懸命に走って漸く辿りついたフェレットを預けている動物園病院、荒れた息を整えながら中に入ろうとしたら途端彼女に強い耳鳴りが襲った、否耳鳴りというレベルではない言いようのない不快感。なのはは思わずその場に蹲って耳をふさいだ。

なのは「何!?これ……………何なの!？」

苦悶の表情で耐えるなのは、それに関係あるのかないのかその不快感は程無くして消えた。そして顔を上げたなのはの視界に広がったのは、此处に来るまでの物とはまるで違っていた。それはまるで世界から色が消えたみたいな異様な光景。これにはなのははいよいよ息を呑んだ、しかし此处まで来ては今更帰るという考えも浮かばない。勇気を出して一歩踏み込んだ瞬間。

????? 「うおおおおお!? ???」

奇声を上げながら二人の男女が病院内から飛び出してきた、女の子の方は赤いチャイナ服を着ており男子の方は眼鏡をかけなにやら時代劇にでも出てくるような和服の着物を纏っている、そして

なんか黒い化け物」 ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ! ! !

少し遅れてその後を黒い異形の化け物が追いかけてくる、シルエツトが最も近いものあげるとしたらさしずめ蜘蛛だろうか。それを見てなのはは

なのは「……………」

当然のことながら呆然としている、まあこうも続けざまにおかしなことが起きれば無理もないだろう。しかしすぐに我に帰る。

なのは「ってなにに!? 一体何!？」

わけも分からずにあたふたとしている所に何か小さいものが自分にめがけて飛んできた、反射的にそれを受け止めるなのは。

????? 「来て……………くれたの?」

なのは「……喋ったっ!？」

昼間彼女が助けた、あのフェレットがなのはを見上げながらそう言い、その事にまた仰天の声を上げるなのは、フェレット(?)は顔を逃げ回っているあの二人の男女に向ける。

????「新八さん！神楽さん！取り敢えずこっちです！！一旦逃げますよ！！」

新八と呼ばれた少年「分かった！」

神楽と呼ばれ少女「んだとおお！！？こんな弱っちそうな化け物相手に尻尾巻くって逃げろってのかああ！！って離すね新八いい！！」

新八「いいから今はユーノ君の言うとおりに従おうよ！！」

フェレットの言葉に眼鏡をかけた和服の少年は素直に頷いたが、チャイナ服の少女はそれに抗議の声を上げる、しかしすぐさま眼鏡の少年に担ぎ上げられ結局なのは達の所まで連れて来られてしまった。

ユーノと呼ばれたフェレット「君も今は兎に角逃げて！分からない訳とかは一度落ち着いたら話すから！」

なのは「う、うん……！！」

自分の掌に収まっている小動物に促され未だに情報が整理しきれなかったが、それでも今はこの場にいるよりかはずっといいのなのは戸惑いながらもうなずき、此処まで走って疲れている足を奮い立たせて再び駆け出した。そのすぐ後を新八と神楽が続きやや遅れて黒い化け物が、敵意むき出しの勢いで追いかける。

なのは「……はあっ……はあっ……はあっ」

一体どれ位走っただろうか？夢中だったために良く分からないが、なのはは一度足を止めて、近くの壁に背中を預けた、そして自分の

手の中から飛び降りたフェレットと自分についてきた男女二人を見る。

なのは「それで……一体何なんですか？」

フェレット「いきなり訳解らない事に巻き込んだじゃって、ごめんなさい！でもどうか力を貸して！君には素質があるんだ！」

なのは「え…………ええええ…………！？」

突然の協力要請の言葉、しかも内容がかなりアバウトな事も加えてにびつくりするのは、それに気にすることなく神楽が屈みこんで、ユーのを自分の掌に載せてなのはを見る。

神楽「それじゃさつき言ってた”魔法が使える人”ってこの子の事アルか？」

新八「……………ってユーかこの子もしかして……………ねえ君、もしかしてお名前は高町　なのはちゃんじゃないかな？」

なのは「え……………え……………えっと、はい！私、高町なのはです！！」

よほどテンぱっているのか上ずった声で、何とか新八の質問だけ答えるなのは。その返事で新八は頭の中にあつた疑問を確かなものにした。そして一人何事か呟き始める。

新八「やつぱりだよ……………まさかとは思ってたけど案の定だよ、この女の子どう考えても魔法少女リリカル　なのはの世界にいるのはちゃんだよ、ユーノ君の辺りで大体察しついてたけどね、でも何でこの子達が此処に？いやもしかしたら僕達が来ちゃったのかな？い

やいやいや、幾らなんでもありの銀魂でもそんなめちゃくちなこと……でも源外さんの無茶な機械からくりの暴走ならありえない事もなさそうだし」

とぶつぶつ言っている新八のことはユーノも神楽もおまけになのはまでスルーする、念のために言っておくが神楽はともかくユーノはなのはに魔法の事を伝えそれを託そうとする事に、なのはは今懸命の起こっていることを自分なりに受け止める事に専念しているだけであり別段他意はない。……多分。

なのは「えっと……その、なにがなんだかよく分からないけど、一体何なの！？何が起きてるの！？」

ユーノ「君には、資質がある。お願い、僕に少しだけ、力を貸して！」

なのは「資質？」

繰り返された身の覚えのない才能の言葉に首を傾げるなのは、ユーノと名乗る喋るフェレットは神楽の手の上から懇願するようになるのはを見上げる。

「僕はある探し物のために、ここではない世界から来ました。でも、僕1人の力では想いを遂げられないかもしれない！だから……迷惑だと分かっているんですが、資質を持っている人に協力してほしい……お礼はします！必ずします！僕の持っている力を、貴女に使って欲しいんです。僕の力を……魔法の力を！」

「魔法……」

もはやファンタジーでしかないその単語になのは小さく呟いた。

SIDE なのは

えっと、魔法ってあれだよな？

よくゲームとかお話とかで出てくる魔法の事だよな？

………そっかぁ………魔法かぁ………。

なのは「無理無理無理無理無理無理無理無理無理！！！！！！私にそんな力とかないよ！！」

即否定する私、ごめんなさい！！でもいきなりな事が多すぎて何がなんだか全然分かりません！！ただ今この喋るフレットさんから言われてる事がかなり無茶だって事だけは分かりました！こういうのをアリサちゃんがこの前言ってた”無茶ぶり”っていうんだっけ？

ユーノ「………気持ちは凄く分かります………、でも君には君自身気づいていない力がある！少しの間だけでいい、僕も全力で君を助ける！！だから………っ!？」

私の言葉にもめげずにフレットさん…ユーノ君と違って呼ばれて

たっけ、その子が強いまなざしで見上げてきます、ただ言葉の途中でその視線が私から真上の空へと動いて私もつられるように見上げます。其処にはさつき逃げ出したあの良く分からない黒い生き物が……！！

ユーノ「くっ……！まだ契約も完了していないのに……！」

新八「ユーノ君！！此処は僕達に任せて……！」

神楽「お前はさつさとその女の子を連れて逃げるネ！！やることやったら帰ってくるアル！その頃には終わらせといてやるからヨ！」

私何かを言う前に、良く分からない生き物は私達のすぐそばに落ちてきて、チャイナ服の女の子と和服の男の人が私達を守るように立ちふさがってくれた。

ユーノ「……っごめん……！なのはちゃんって言ったよね？もう少し走れる……！」

ユーノ君が少し迷った様子で二人を見ただとすぐに私に向き直った、それはつまり二人の言葉に甘えってという事だよね！？

なのは「でもそれじゃ……！」

ユーノ「今は我慢して！どの道今の僕達じゃあの怪物とは戦えないっ！」

遮られた言葉に私は何も言えなくなる……、確かにこのまま此処にいたって意味がない、それどころか邪魔にだってなりかねない。

……そこで、私は思い切る事にする。さつきこの子が私に言うてく

神楽「っ！ちびっ子お！！！」

あのチャイナ服の女の人、眼鏡の和服の人を担いだ状態でその攻撃をよけてたけど、その先に私がいるとは思ってなかったみたいで叫ぶ、”何かしなきゃ”というのは頭じゃ分かってるのに肝心の体が動いてくれません。

なのは「っ！！」

せめてぎゅっと目を強く瞑って痛いのが来るのに耐えようと思いました。

だけど覚悟してた痛みは来ずに、かわりになにかとなにかが勢いよくぶつかり合うような、凄い音がすぐ近くで聞こえました。思わず身が竦んじやう私、凄く怖かったけどゆっくり目を開いてみます、そこには

????「ふいゝなんかいいタイミングで私登場できたみたいだね、後ちよつと遅かったらかなりやばい事になってたかも」

場にそぐわない、どこか気抜けしたようなのんびりした感じの声をした、足元まで延びてる青い髪の子が黒いあの怪物の足の一撃を、同じく突き出した片足で受け止めていました。

SIDE なのは 了

ゝおまけゝ

銀八「教えて！！」

ALL「銀八先生!!」

銀八「つーわけで今回も張り切っていく事にするぞこのコーナー!」

恭平「アシスタントはいつも通りにこの俺恭平と」

こなた「

銀八「つつても質問あんのは一人だけなんだがな、毎度のように質問送ってくれるペンネーム黒龍さんには本当に感謝だ!」

恭平「先生が先に言っちゃたけど、ペンネーム黒龍さんからの質問行くぞ」

1・なのはに質問。 やつと登場できて嬉しいですか（黒笑）

2・恭平に質問。 あなたは基本こなたと喧嘩する事があるんですか？

3・こなたに質問。 温和そうに見えて、バトルジャンキーあなたも戦闘狂だったりしますか？

こなた「それじゃ一つ目はなのはちゃんの答えてもらおうかな?」

なのは「え?何のこと?私は今回の本編が初登場だよ?おまけアツカイなハズ無いじゃないですか。だって主人公なんだから………影が薄いかいった人はちよつと私とO H A N A S H I しませんか?あは、アハハハハハハハハハハ!!!!!!」

こなた「どうしよう恭平、小学生とは思えないほどの威圧感だよ……」

恭平「よもやこのときから既に悪魔の素質を持っていたとはねえ……俺フェイト側でよかったあ」

銀八「んじゃ二番目の質問な、恭平どうなんだ？」

恭平「あ……そうだな、喧嘩って言えるかどうか分かんないけど良くアニメやゲームの認識の違いで言い争いになる事は良くある……」

こなた「でも時々本気で喧嘩する事あるよね」

恭平「そういう時は大概理由がしょーもないしな、最後は俺が謝って終りだ」

こなた「んじゃ最後のは私がお答えするよ、自分じゃ違うと思ってるけどね。唯この世界じゃそんな事も言ってられないから、降りかかってくる火のことは払うし邪魔するような連中には容赦しなよ？そのためのチート能力！」

銀八「今回も何とか締めれたな、つー訳で黒龍さんは廊下にとたつきなさい」

恭平「よかったな二人とも、念願かなってよ」

こなた「うん、ちょっと遅すぎる気もするけどこの際気にしないよ」

なのは「次回は私やこなたちゃんたちがバトルで活躍のお話なの？ だったら私の星光粉s」

恭平・こなた「君まだそれ使えないから」

第伍訓　突っ走る少女はいろんな意味でとめられない（後書き）

木の精だ「というわけで、いかがでしたでしょうか、別サイドとしての”こなた編”！」

恭平「今回もバトル開始直前で終了か……まああんまり飽きられないようにな」

こなた「次回！」魔法の言葉はテクマクマヤコン以外認めたくなかった”スピンオフだよ！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567v/>

リリカル銀 すた！～世の中はカオスで出来ている～

2011年10月17日06時55分発行